令和５年度
対馬市島おこし協働隊年間活動報告

目　　次

1.対馬市島おこし協働隊制度概要　P1

2.対馬市島おこし協働隊　隊員プロフィール　P2～

3.令和５年度島おこし協働隊　年間活動報告書(要旨)　P6～P16

4.令和５年度島おこし協働隊　年間活動報告書　P17～P66

吉原　知　子　隊員　(対州馬保存・活用支援担当)　P18～

釜坂　　綾　　隊員　(海の森再生支援担当)　P22～

瀬谷　友　啓　隊員　(自然共生チャレンジャー)　P27～

庄司　絵里加　隊員　(コミュニティ支援担当(北部担当))　P33～

大野　亜寿沙　隊員　(コミュニティ支援担当(南部担当))　P39～

橘田　ゆかり　隊員　(北部対馬活性化プランナー)　P44～

荒井　勇　人　隊員　(自然共生チャレンジャー)　P48～

中屋　　桜　　隊員　(対州馬保存・活用支援担当)　P52～

岡本　遥　香　隊員　(SDGs 研究員)　P56～

千原　佑　介　隊員　(中対馬ご当地プロデューサー)　P63～

対馬市島おこし協働隊制度概要

地域づくり課　島おこし協働隊事務局

分　類	詳　細
事業目的	特定分野の専門知識・経験や社会貢献への熱意を有し、地域づくりや島暮らしに関心を持つ **都市部の外部人材を受け入れ、外部目線を活用した地域づくりの支援**を行う。
制度開始	平成 23 年度（総務省地域おこし協力隊制度を活用） 全国の導入団体数/隊員数：31 団体/89 名（H21）⇒1,118 団体/6,447 名（R4）
予　　算	特別交付税による財政支援（人件費 330 万円/活動費 150 万円）、市一般財源
特　　色	市各部局における重点施策の推進を図ること、専門性を有する優秀な人材を確保するため、 活動分野を絞った公募を実施するとともに、各隊員は各事業担当部局へ配属している。
隊 員 数	現役隊員：10 名(令和 6 年 3 月 31 日現在) OB／OG　：35 名（男性 18 名、女性 17 名）うち定住 14 名（男性 7 名、女性 7 名） ※定住者 14 名のうち起業定住 10 名（男性 5 名、女性 5 名）
推進体制	・全体マネジメント：島おこし協働隊事務局（しまづくり推進部地域づくり課） 例）外部への活動周知、隊員間の連携業務調整、取材対応等、採用事務 ・活動コーディネート：各担当課（※各隊員に担当者を配置） 例）活動内容の策定、業務管理等 ・報酬・共済関係　：総務部人事課
成　　果	・地域・市民活動の活発化に寄与 ・隊員の活動をきっかけとする関係人口・移住定住者の存在 ＝「人が人を呼び込む好循環」 ・優秀な人材の定住 ・社会貢献型ビジネスの創出（任期終了後の起業者）

協働隊の日々の活動の発信はこちら

島おこし協働隊 Instagram

島おこし協働隊 Facebook

対馬市島おこし協働隊 隊員プロフィール

◎吉原　知子（よしはら　ともこ）　対州馬保存・活用支援担当

【所　　属】: 上対馬振興部上県行政サービスセンター
【着　任　日】: 令和２年５月１日
【ミッション】
対州馬の魅力の共有及び発信、対州馬を介した地域間交流に加えて、専門家（獣医師）の視点に立った対州馬保存及び対州馬活用支援の業務を担う。

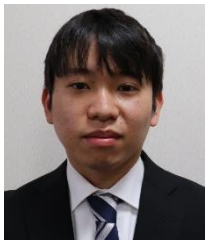
【プロフィール】
東京都品川区から移住。日本大学生物資源科学部獣医学科卒業。移住前は小動物臨床獣医師として都内の動物病院等に勤務していた。対馬には域学連携事業等で来島経験があり、地域の人々と交流を深め、対州馬など対馬固有の資源に触れる中で、本格的に対馬の地域づくりに携わりたいと考えて島おこし協働隊を志願した。

◎釜坂　綾（かまさか　りょう）　海の森再生支援担当

【所　　属】: 農林水産部水産課
【着　任　日】: 令和３年４月１日
【ミッション】
海の森（藻場）を再生することで漁業者が安心し、安定的な生活を行うとともに、若者が島で漁業を営み暮らせる環境づくりを目指す。また「海の循環」を推進し資源回復に積極的に取り組み、その具現化を図る。

【プロフィール】
広島県尾道市から移住。長崎市出身。福山大学工学研究科生命工学専攻（博士前期課程修了）。大学生時代、対馬にインターンで来島した際に水産資源の豊かさやその固有性に強く惹かれるとともに、有害魚による磯焼け被害も目の当たりにし、その改善や地域への啓発事業等に積極的に携わりたいと考えて協働隊を志願した。

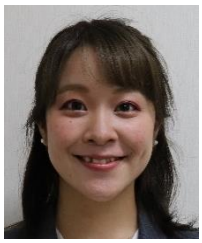
◎瀬谷　友啓（せや　ともひろ）　自然共生チャレンジャー



【所　　属】: 農林水産部自然共生課
【着　任　日】: 令和３年４月１日
【ミッション】
増えすぎたシカによって山の植物が激減し、生態系のバランスが崩れてしまった対馬において、シカの捕獲駆除をはじめとした自然と人の暮らしの共存に関する活動を通して、自然共生型社会の実現を目指す。

【プロフィール】
栃木県足利市出身。富山大学理学部生物圏環境科学科卒業後、JICA 海外協力隊候補生として北海道上士幌町で半年間の特別派遣前訓練を経験。狩猟に興味を持ち、大学在学中には富山県をフィールドに狩猟者に関する研究を行っていた。地域課題の解決に熱意を持って取り組みたいと考えて協働隊を志願した。

◎庄司　絵里加（しょうじ　えりか）　コミュニティ支援担当（北部担当）



【所　　属】: しまづくり推進部地域づくり課
【着　任　日】: 令和３年７月１日
【ミッション】
対馬北部において地域支援にかかるニーズ調査、それに基づく地域支援策の検討と実践を行い、コミュニティ社会の維持と強化を目指す。現在、ダンスを切り口としたコミュニティ活性化に取り組んでいる。

【プロフィール】
神奈川県川崎市から移住。東京外国語大学国際社会学部アフリカ地域専攻卒業。父の故郷が上対馬ということもあり、幼少期に訪れた際の幸せな記憶が忘れられず、いつか自分の能力を活かして、対馬北部に貢献したいと考えて対馬市島おこし協働隊を志望した。コミュニティ支援担当として、北部地域を中心に人との繋がりを大切にしながら、島民目線での地域づくり支援に取り組んでいる。

◎大野　亜寿沙（おおの　あずさ）　コミュニティ支援担当（南部担当）

【所　　属】: しまづくり推進部地域づくり課
【着　任　日】: 令和４年６月１日
【ミッション】
対馬南部において地域支援にかかるニーズ調査、それに基づく地域支援策の検討と実践を行い、コミュニティ社会の維持と強化を目指す。現在、空き家対策を切り口としたコミュニティ活性化に取り組んでいる。

【プロフィール】
福岡県福岡市から移住。移住前は不動産業界にて賃貸営業や情報通信業界にて企画推進の業務に従事。以前より離島への移住を希望しており、移住した際にはその島に貢献できるような仕事をしたいと考えていたため、島おこし協働隊を志望した。地域の問題である空き家対策から、移住定住促進、移住者と地域住民の交流を念頭に置き活動を行っている。

◎橘田　ゆかり（たちばんだ　ゆかり）　北部対馬活性化プランナー

【所　　属】: 上対馬振興部地域振興課
【着　任　日】: 令和４年８月１日
【ミッション】
北部対馬の観光について自然、歴史、文化、伝統等を活かした企画・立案をするとともに、地域・事業者と連携して問題解決に取り組み、地域の観光業・商工業の発展を目指す。

【プロフィール】
神奈川県鎌倉市出身。2 児の母。総合商社（機械輸出）、クルーズ客船（フロントクラーク、世界一周）、スペイン留学、日本政府観光局勤務を経て、家族の対馬勤務が決まったことと、地方での子育てを希望し、島おこし協働隊を志望。北部対馬エリアの観光業の発展のため、英語での情報発信や案内所業務、対馬暮らしの魅力発信のため、子育てコミュニティ運営などに取り組んでいる。

◎荒井　勇人（あらい　はやと）　自然共生チャレンジャー

【所　　属】: 農林水産部自然共生課
【着　任　日】: 令和４年 10 月１日
【ミッション】
増えすぎたシカによって山の植物が激減し、生態系のバランスが崩れてしまった対馬において、シカの捕獲駆除をはじめとした自然と人の暮らしの共存に関する活動を通して、自然共生型社会の実現を目指す。

【プロフィール】
神奈川県逗子市出身。移住前は陸上自衛隊(静岡)、レザークラフト専門店(大阪)での勤務を経て、京都市から移住。妻の出身地が対馬であったことをきっかけに対馬を知った。自然共生型社会の実現を目指す為、前職の経験を活かし、対馬の生態系保全活動と有害鳥獣問題の解決に取り組んでいる。

◎中屋　桜（なかや　さくら）　対州馬保存・活用支援担当

【所　　属】: 上対馬振興部上県行政サービスセンター
【着　任　日】: 令和５年４月１日
【ミッション】
対州馬の保存を行うために、安定した繁殖管理を目指す。
また、島内住民に向けた対州馬活用機会の増加と、島外ファン獲得・交流人口増加を目指す。

【プロフィール】
岐阜県高山市出身。高校・大学で７年間在来馬の飼養管理・普及啓発活動に取り組む。対馬での実習に参加した際に、乗馬体験や子供乗馬教室など、積極的に対州馬の活用に取り組む関係者の思いに触れ、対州馬を通して人や地域に関わりたいと思い志願した。

◎岡本　遥香（おかもと　はるか）　SDGs 研究員

【所　　属】: しまづくり推進部 SDGs 推進課
【着　任　日】: 令和５年４月１日
【ミッション】
環境・社会・経済分野の統合的かつ戦略的なデータ収集・分析を行い、客観的なデータに基づく地域課題解決策を提案するとともにこれらを通じて当市における SDGs 推進に取り組む。

【プロフィール】
福岡県糟屋郡粕屋町出身。インターンシップ生として対馬に訪れ、自然の美しさ、人の温かさに触れ対馬に魅力を感じた一方で、海洋プラスチックごみ問題や、獣害、磯焼けといった深刻な問題を目の当たりにした。自分の目と耳で課題を知り、同世代の人を中心に対馬のことや SDGs のことを広く知ってほしいと思い志願した。

◎千原　佑介（ちはら　ゆうすけ）　中対馬ご当地プロデューサー

【所　　属】: 中対馬振興部地域振興課
【着　任　日】: 令和 5 年 10 月 1 日
【ミッション】
外の目から見た魅力をリストアップし、観光メニューや体験メニュー、各種事業者の取組に付加価値を付けることで、中対馬の魅力向上につなげ、交流人口の拡大・消費拡大、地元産業の活性化に取り組む。

【プロフィール】
熊本県上益城郡出身。薬品会社で勤務する傍ら趣味の魚釣りで九州各地の島を頻繁に訪れるうちに、島での生活に憧れを抱いた。島に貢献できる仕事を探していたところ、営業職で培ったコミュニケーション能力や目標の達成に向けた計画・実行能力を発揮できる島おこし協働隊の募集を見つけ志願した。

令和５年度
対馬市島おこし協働隊年間活動報告
（要旨）

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書（要 旨）

氏 名 吉原 知子 （対州馬保存・活用担当）

Ⅰ 令和５年度の活動成果

1.子ども世代での対州馬活用
2.対州馬展・対州馬シンポジウムの開催
3.アイスランド在来馬視察
4.対州馬の繁殖と体調管理
5.後任への引継ぎ

Ⅱ 今後の展開について

1.任期終了後の自身の活動
（1）鹿児島県で就職
（2）大学院進学
（3）対州馬関連業務のサポート

2.対馬市に継続して取り組んでほしい事項
（1）教育普及活動
（2）対州馬の増頭

Ⅲ ４年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1.対馬の魅力・・・・・・人の良さ
2.対馬への提案・・・・島おこし協働隊を活用した対州馬関連業務の継続と、将来的な目標設定

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書（要 旨）

氏 名 釜坂 綾 （海の森再生支援担当）

Ⅰ 令和５年度の活動成果

【藻場調査】

対馬沿岸の過去・現在の藻場情報の収集・集約を目的として、下記各項目の調査を行った。アマモについては 40 年前と比較して面積が約 90％減少していることが明らかとなった。

・アマモ場マップ作成（聞き取りおよび現地調査に基づく）
・定点藻場調査（4 地点、31 回）、潜水調査（5 地点 5 回）、水中ドローンによる藻場撮影(8 地点)

【藻場再生】

減少傾向にあるアマモの生息域外保全を目的として、屋外水槽での栽培試験および藻場保全組織による移植活動の補助を行った。

・アマモ屋外水槽栽培試験（栽培公社） ・アマモ移植の補助（東海地区藻場保全組織と合同）

【普及啓発】

前述の調査結果を基に、海の魅力発信および磯焼けの現状を啓発する活動を行った。今年度は特に各教育機関等への出前授業と、掲示・配布物の作成に注力した。

・磯焼けの進行に関する聞き取り・マップ作成
・藻場紹介パネル掲示、アマモについてのリーフレット配布
・出前授業/移動水族館（計 15 回）、おしえて市役所さん（計 2 回）、メディアへの写真提供

Ⅱ 令和６年度の活動予定

・藻場調査結果の整理、公表 ・アマモ場マップの完成、公表 ・アマモ栽培試験の継続
・出前授業/移動水族館の充実 ・厳原庁舎玄関水槽「しますい」の展示の強化

Ⅲ １年間の活動を通じて感じたこと

磯焼けは全島に広がり、着任期間中に大型海藻が消失した地点も複数ある。原因究明及び効果的な対策の提案・実働組織 兼 普及啓発の場として、研究拠点を島内に整備すべきと考える。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書（要 旨）

氏 名 瀬谷 友啓 （自然共生チャレンジャー）

Ⅰ 令和５年度の活動成果

有害鳥獣捕獲活動

２種類のIoT機器を使用して、イノシシ１頭、シカ１頭を捕獲した。

・オリワナシステム：長距離のデータ通信を可能とする無線通信技術。

・TREL 4G-R：携帯回線を介して双方向に通信が可能な自動撮影カメラ。

潜り込み式囲いわなの実証実験

防護柵の穴や隙間から農林地に侵入しようとするシカの習性を利用したもので、ゲート下部の隙間からわなの内部に潜り込めるが、一度内部に侵入したシカは外に出られない 一方通行の仕組みのゲート。

協働隊フェス 狩猟体験とポスター発表

シカ捕獲の際に使用する罠道具の展示や体験と、協働隊の活動報告をポスター形式で発表した。来場者の方にシカの生態やくくり罠を設置する際の注意点の説明を行い、くくり罠の作動を体験してもらった。イベントには出展者も含め 344 人が来場した。

Ⅱ 今後の展開について

退任後は、JICA海外協力隊として南米のエクアドルに派遣予定である。派遣先では、地域住民に対して環境に対する意識向上のための啓発活動を行う。対馬での 3 年間の有害鳥獣捕獲等の経験を活かし、活動を行いたいと考えている。

Ⅲ ３年間の活動を終えるにあたり感じたこと

対馬の一番の魅力は自然だと思う。四季折々の豊かな恵みを受けて、身も心も満たされた 3 年間であった。急増したシカによる被害は、自然と共に暮らしている対馬において、対馬らしい生活を変えてしまうほどの影響があると感じた。対馬において有害鳥獣対策は自然だけでなく、暮らしを守ることにも繋がっていると感じた。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書（要 旨）

氏 名 庄司 絵里加（コミュニティ支援担当（北部））

Ⅰ 令和５年度の活動成果

1. ダンスを通じた地域活性のための取り組み

(1) 北部エリアの教育機関でのダンス指導

(2) 上対馬総合センターでの自主講座「ロックダンス教室」の運営

2. YouTube チャンネル「えりやん Tube」での対馬暮らしの魅力の発信活動

3. 定住に向けた活動

(1) ダンス教室の継続、拡大（個人の活動として）

(2) 事業の開拓

4. その他

(1) 比田勝小学校６年生 ふるさと学習「対馬活躍人講座」 講師

(2) イベントでの司会業務（おっどん祭り、対州馬シンポジウム、豊崎神社大祭等）

(3) 第１回協働隊フェスの開催（ダンスワークショップとマルシェを担当）

Ⅱ 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動

(1) ダンス教室の運営

(2) ダンスを用いたアウトリーチの活動

(3) 伝える仕事

(4) ネイル事業

2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項

(1) 市の文化施設の管理及び運営

Ⅲ ３年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

魅力は人のあたたかさ。課題は島内における文化芸術の機会の不平等性。

2. 対馬への提案

文化芸術に触れる機会を全島的に広げるために、既にある島内資源を活用。

ベイビーシアターの制作検討。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書（要 旨）

氏 名 大野 亜寿沙 （コミュニティ支援担当（南部））

Ⅰ 令和５年度の活動成果

⑴ 空き家バンクサポート

⑵ 移住定住

家探しや、契約書作成のサポート

⑶ 視察・研修

鹿児島県大島郡郡龍郷町 あまみ空き家ラボ

地域おこし協力隊研修に参加

⑷ イベント

コミュニティ大工の加藤潤氏を招き佐須奈にて MIT 主催の空き家改修イベント「空き家再生塾 in佐須奈」のサポート

⑸ その他

地域や団体のイベントにてサポート

Ⅱ 令和６年度の活動予定

⑴ 定住に向けた活動

⑵ 空き家改修イベント

⑶ 耕作放棄地の活用

⑷ 空き家バンクサポート

Ⅲ １年間の活動を通じて感じたこと

空き家探しや改修イベントに参加させてもらい感じたことは、人の言葉を鵜呑みにしてどう行動するか判断するのではなく、先入観をなくし自分自身でしっかりと確認をおこない行動していくことが大事だということを実感した。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書（要 旨）

氏 名 橘田 ゆかり （北部対馬活性化プランナー）

Ⅰ 令和５年度の活動成果

1. 「つしま森の教室」（こどもの自然体験コミュニティ）運営
   ／今年度 10 回、対馬青年の家、地域の方に協力いただき、森のようちえん型のイベントを開催、
   子育て世代の交流機会提供、対馬の子育て魅力発信、今後の継続方法が課題
2. 観光 PR 関連
   ／SNS での情報発信（Instagram5 アカウント等）、
   Google map 情報登録（閲覧数は昨年度 68 万回→今年度 546 万回）、
   比田勝国際ターミナル窓口業務、英語翻訳担当
3. 協働隊全体に関連する活動
   ／対馬市 HP プロフィールページ新設、 Instagram アカウント開設、
   協働隊フェス開催
4. 先進地視察／千葉・仙台・対馬・五島列島・滋賀・諫早・熊本（予定）
5. その他／登山（清掃）・国際交流（国境の島）トライアルイベントの企画運営、
   観光ガイド（UAE、ブラジル（英語））、
   昨年度作成比田勝おさんぽマップの多言語化

Ⅱ 令和６年度の活動予定

1. 定住に向けた活動／事業検討、拠点探しを予定
2. その他の活動予定／つしま森の教室（継続）、対馬観光情報 PR 冊子制作

Ⅲ １年間の活動を通じて感じたこと

1. 対馬の「ここでしか、今しか」できない体験の提供が必要
2. 民間への機会提供を検討
3. 島外からの移住、関係人口の呼び込み
4. 観光案内所の役割再検討
5. 短期間の対馬子育て体験機会提供

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書（要 旨）

氏 名 荒井 勇人（自然共生チャレンジャー）

Ⅰ 令和５年度の活動成果

1. ICT を活用した有害鳥獣対策と生態系被害対策
   (1) 潜り込み式囲い罠
   (2) 年間捕獲活動実績
2. 銃器を用いた捕獲活動への挑戦に向けて
   (1) 第1種銃猟免許の取得
   (2) 猟銃所持許可の取得
   (3) ハンティングドローンの操縦免許取得
3. ジビエレザーを用いた地域イベント
   (1) 各種地域イベントへの出店
   (2) 第1回 協働隊フェス
   活動報告会の中止に伴い代わりとして、協働隊員同士が協力し、企画した体験型の活動報告イベントを開催。

Ⅱ 令和６年度の活動予定

1. 継続的な有害鳥獣対策、効果的な捕獲手法の模索
2. 共猟への参加
3. ジビエ素材を活用した地域活動

Ⅲ １年間の活動を通じて感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

【魅力】

山や木々の緑、太陽の光で輝く海など、美しい自然の景色が豊富にある。
季節によってもその表情は変わり、いつ見ても感動できる景色が存在するところが魅力。

【課題】

美しい景色のすぐ隣には漂着ごみがあったり、山の中には不法投棄されたゴミがあったり、下層植生などの生態系被害であったり、自然環境への課題があると感じる。

2. 対馬への提案

最近では、地域のイベントやお祭りが開催されたり、新しいお店ができたり地域の活性化を感じる。今後も丁寧なサポートがあればより良い対馬になっていくと思う。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書（要 旨）

氏 名 中屋桜（対州馬保存・活用支援担当）

Ⅰ 令和５年度の活動成果

1. 子ども世代に向けた対州馬活用

(1) 保育園、小中学校における総合的な学習の時間

(2) 子ども乗馬教室（ほっぷすてっぷ対州馬）

(3) 対州馬乗馬教室発表会・ふれあい体験会

2. 対州馬における飼養管理に関する調査

(1) 対州馬見守りカメラの設置（TREL-4GR）

(2) Wi-Fi 型見守りカメラの設置

3. その他

・先進地調査（長野県木曽町 木曽馬の里、長野県茅野市 蓼科ポニー牧場、東京都目黒区碑文谷こども動物広場、東京都葛飾区ポニースクールかつしか、神奈川県相模原市相模原麻溝公園ふれあい動物広場）

・研修（沖縄県 宮古島での在来馬講習会）

・普及啓発イベント（長崎県森きらら、宮城県八木山動物公園）

Ⅱ 令和６年度の活動予定

1.乗馬教室の継続と拡大 乗馬イベントを教員や小中学生にむけても

（1）教員向け乗馬会の実施

（2）小中学生に向けた乗馬イベントの実施

2.ホースセラピーの実施 福祉分野での活用を強化

3.対州馬の飼養管理に関する調査の継続・拡大

4.対州馬イベントの実施

5.聞き取りの実施

Ⅲ １年間の活動を通じて感じたこと

対馬で一年間活動し、豊かな資源が対馬の魅力であり、それらから構築される対馬の風景や環境は非常に価値のあるものだと感じている。来年度の活動においては、対州馬と魅力ある他の分野をつなげることで、観光や福祉などこれまであまり活用されてこなかった分野での活用を行うほか、さらなる教育分野の強化など幅広い対州馬の活用につなげていきたいと考えている。

令和5年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書（要 旨）

氏 名 岡本 遥香（SDGs 研究員）

Ⅰ 令和5年度の活動成果

1． 対馬グローカル大学 高校生ゼミ講師

対馬グローカル大学高校生ゼミ講師として、ゼミ 4 回と修了発表を通じて、対馬高校の生徒に対馬の未来の暮らしを今の対馬の魅力や課題から考えるプログラムの指導を行った。

2． 対馬モデル調査研究

島のサーキュラーエコノミーモデル「対馬モデル」の柱である資源循環分野について、モデルの具体化に向けて対馬の現状把握、他地域での実践事例について調査を行った。

(1) 島内の事業者への実態調査：アンケート調査・ヒアリング調査

(2) 事例調査・情報収集

3. その他

Ⅱ 令和6年度の活動予定

1． ESD 推進支援

(1) 対馬グローカル大学 高校生向けプログラム運営支援

(2) 島内教育機関（小学校・中学校・高校等）における ESD 推進支援・連携

2. 対馬モデル研究・モデル構築

(1) 資源回収ステーション設置に関する調査研究

(2) 対馬モデルにおいて市民が参加できる取組研究及び構築に向けた可能性検討

3. 対馬市の SDGs 推進のための広報活動

(1) SNS を活用した SDGs アクションのきっかけづくり

(2) 無関心層への普及啓発

Ⅲ 1年間の活動を通じて感じたこと

1． 対馬の魅力と課題

特有の豊かな自然と昔からの人のつながり、そのあたたかさは対馬の大きな魅力だと感じている。しかし離島として街にはない多くの課題があり、それに対しての市民の関心の低さも改善していくべき課題であると感じる。

2． 対馬への提案－「行政職員の SDGs についての学習・情報収集」

市民の無関心に対策するためにはまず働きかける側の行政職員も SDGs に関心を持つべきであり、その取組を提案する。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書（要 旨）

氏 名 千原 佑介 （中対馬ご当地プロデューサー）

Ⅰ 令和５年度の活動成果

インスタグラムアカウントちゃーりー対馬暮らし@cha_ry1217 運営
ミッション「対馬市民の当たり前を魅力として発信する取り組み」
対馬の観光スポット、綺麗な風景、対馬ならではの体験の投稿
10 月 5 日運営開始 投稿数26 フォロワー456 人（2 月 20 日時点）
五島、壱岐、対馬お土産品販売会に参加

Ⅱ 令和６年度の活動予定

神話の里 憩いの家売店計画
神話の里をトイレ休憩スポットから観光スポットへ
引き続き SNS での情報発信
（対馬市民の当たり前を発信、地元産品 PR,市営渡海船利用促進）
目標 令和6年度中にインスタグラムフォロワー1500人
新たに Tiktok での情報発信

Ⅲ １年間の活動を通じて感じたこと

対馬には美しい風景、歴史ある文化、海の幸、山の幸ともに美味しい食べ物など沢山ある。
全国的にみるとまだまだ知名度が低いため、島外に向け発信していく必要がある。

対馬市への提案
移住者向けに物件情報をより詳しく提供してみてはどうか。

令和５年度
対馬市島おこし協働隊年間活動報告
（実績報告）

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書

所　　属　上県行政サービスセンター
ミッション　対州馬保存・活用支援担当
氏　　名　吉原　知子

Ⅰ　令和5年度の活動成果

1.子ども世代での対州馬活用

（1）子ども乗馬教室（対州馬少年倶楽部）

昨年度に引き続き、馬に興味がある子ども達を対象に、乗馬教室（対州馬少年倶楽部）を月に 1～2 回実施した。目保呂ダム馬事公園にある、馬跳ばせ（対州馬の競馬）のコースを疾走できるようになった児童もおり、非常に頼もしい。

（2）宮城県仙台市とのオンライン地域間交流

昨年度に引き続き、仙台市にある乗馬倶楽部（ゼロ村牧場ﾊﾟｶﾗｯﾁｮ!!）に現地コーディネートを依頼し、対州馬少年倶楽部と、ゼロ村牧場ﾊﾟｶﾗｯﾁｮ!!に通う子供たち同士のオンライン交流を全４回で実施し、７月末には仙台でのリアル交流を実施した。オンライン越しでしか顔を知らなかった相手と直接会って交流するのは印象深い体験となったようである。

また、仙台市八木山動物公園での対州馬普及啓発イベントでも子ども達が活躍した。子ども達にクイズを出題してもらい、子ども自身が普及活動の担い手である自覚を持ったのではないかと期待する。

来仙に合わせ、福島県南相馬市で実施された相馬野馬追も見学した。対馬では初午祭という対州馬が活躍する祭りがあるが、会場の盛り上げ方等、初午祭にも生かされれば良いと感じた。

2. 対州馬展・対州馬シンポジウムの開催

（1）対州馬展

8 月 11 日～9 月 18 日に、対馬博物館の1F ギャラリー及び 2F 講座室にて「対州馬展」を開催した。東京都恩賜上野動物園等、島外 10 施設にご協力いただき、同じものを展示いただいた。1F では生き物としてのウマ、日本在来馬、対州馬の過去と現在についてまとめた。子どもでも親しみやすいように馬糞やエサ、等身大の対州馬パネル、多様な毛色のミニチュア馬模型を並べた「十毛牧場」を展示し、パネル無しでも楽しめるよう工夫した。毛色については、現在の対州馬の毛色関連遺伝子解析結果と、江戸時代の対馬藩の記録である『御牧馬井二御預ケ馬帳』（宗家文書）を比較し、科学と歴史を組み合わせて展示した。

一方、2F では古墳時代～江戸時代の対馬の馬（混乱が生じないよう、明治以後の対馬の馬を「対州馬」として扱った）についてまとめた。現在は対馬市内に 46 頭しかいない馬だが、武士・貴族には戦闘兵器やステイタスシンボルとして、庶民には農林業のパートナーとして馬が必要不可欠だったことを強調した。また、対馬は国内で最も朝鮮半島に近い国境の島であり、中世には対馬産馬が李氏朝鮮との交易に使われる等、地域性を感じさせる史実も展示に加えた。展示室中央には対馬藩士由来の江戸期の馬具を展示した。

約 5 週間の開催期間中、対馬博物館では延べ 5000 人以上が「対州馬展」を見学した。オンラインアンケートでは、約 60 人中 7 割が「馬が対馬の歴史と深く関わっていること」について、「対州馬展」を通し初めて知ったと回答した。対州馬の歴史についてあまり知られていないのは、これまで学術調査成果をまとめて展示する機会が無かったことにも起因するかもしれない。今後は誰もが気軽にアクセスできるよう、対州馬展の内容を図録にまとめ、対州馬保存会ウェブサイトでも公開した。

（2）対州馬シンポジウム

8 月 23 日に、対馬市交流センターにて対州馬シンポジウムを開催し、100 名以上が参加した。前半は対州馬の歴史を分かりやすくスライドにまとめて説明した。後半は、元 JRA 騎手の岡部幸雄氏等、馬業界で有名な方々にご登壇いただき、パネルディスカッションを実施した。対州馬少年倶楽部の小学 6 年生 3 名もパネラーとして参加し、今後の対州馬について語ってくれた。

3.アイスランド在来馬視察

9 月 24 日～10 月 6 日に、全国乗馬倶楽部振興協会の助成を受け、在来馬で大きな成功を収めているアイスランドを視察した。ウマ学科のある Holar 大学、ホースショー、北部アイスランドで行われている大規模な馬集め等を見学し、馬が身近な社会を体感することができた。

アイスランドでは、農作業で馬を使用している人はもうおらず、乗用馬としての育種が盛んである。対州馬は現在保護対象であるが、先々のことを考えると、育種目標（どのような馬が欲しいか）を検討するべきでは無いかと感じた。

4.対州馬の繁殖と体調管理

昨年度学んだ繁殖に関する技術と知識を活かし、直腸エコー検査を行い、繁殖適期を迎えた対州馬 1 頭を種付けし、妊娠を確認した。その対州馬は令和 6 年度 4 月初旬に出産を迎える予定である。

また、現場職員と協力し、体調に不安のある馬の診察と治療を行った。

5.後任への引継ぎ

令和 5 年 4 月 1 日に、島おこし協働隊（対州馬保存・活用支援担当）として着任した中屋桜隊員に引継ぎを行い、私が退任後も対州馬の普及啓発がスムーズに行えるよう努力した。

6.その他

・メディア出演及び掲載（R6.3.1 放送予定 NHK 長崎「ぎゅぎゅっと長崎」）
・講演依頼（R5.11.8 長崎県畜産協会主催 馬の飼養衛生管理に関する講習会、
R5.11.12 馬といる領域ミーティング 2023）
・学会発表（第 36 回ウマ科学会学術集会）
・研修（兵庫県 三木ホースランドパークでのナチュラルホースマンシップ講習）

Ⅱ 今後の展開について

1.任期終了後の自身の活動

（1）鹿児島県で就職

社会福祉法人落穂会に獣医師兼乗馬インストラクターとして勤務し、日本在来馬の活躍機会の増加を目指す。

（2）大学院進学

鹿児島大学共同獣医学部獣医学科の博士課程に進学し、対州馬やその他の日本在来馬についての研究を継続する。

(3)対州馬関連業務のサポート

2～3 か月に一度、対馬へ戻り、対州馬の繁殖と職員の乗馬スキル向上をサポートする。

2.対馬市に継続して取り組んでほしい事項

(1)教育普及活動

対州馬少年倶楽部参加児童のような、馬が大好きな子ども達を増やすことで突破口が見いだせると感じている。この活動が続くことで、対州馬の未来が開けるのではないだろうか。

(2)対州馬の増頭

対馬市の努力により、対州馬は現在 44 頭まで増頭した。今後も増頭させることで利活用の道も見えてくると考える。

Ⅲ　4年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1.対馬の魅力

人の良さが何よりの魅力だと感じる。真剣に取り組んでいることに対し、応援して下さる方々、また上司の尊大にとても励まされた。

2.対馬への提案

対州馬関連業務に島おこし協働隊を従事させ、継続的な教育普及活動を展開することを提案します。対州馬の教育普及活動は、対馬市民の生活を豊かにし、対州馬保存活動の未来を創るうえで大変重要です。その中で、任期満了後も継続意志がある者がいれば、市職員として関わっていただくのがよいのではないかと考えます。

最終的には、対馬市が管理する頭数を定めたうえで、対馬市内外で対州馬の繁殖と活用を実施させ、一般的最低目標頭数と言われる 100 頭を目指すのが妥当ではないでしょうか。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書

所　　属　農林水産部水産課
ミッション　海の森再生支援担当
氏　　名　釜坂 綾

Ⅰ 令和５年度の活動成果

1. 藻場調査

対馬沿岸の過去・現在の藻場情報の収集・集約を目的として、下記各項目の調査を行った。アマモについては 1980 年頃と比較して面積が約 90%、地点数は約 70%減少していることが明らかとなった。

(1) 定点藻場調査

対馬の沿岸生態系及び生物多様性の実態把握と長期的なモニタリングに向けた基礎的資料の作成を目的として、藻場の現状把握、海藻・魚類の出現種数について、令和 3 年度から調査を継続している。

大潮前後の干潮時に胴付き長靴（以下ウェーダー）を着用し、タモ網・徒手による魚類・海藻採取と水中カメラによる記録等を行った。調査地点はアマモ場 2 地点（上県町仁田川下流域、美津島町賀谷河口域）、ガラモ場２地点（上対馬町大増オメガ公園の地磯、上対馬町芦見～一重間の地磯）の計４地点で、概ね毎月 2 回ずつ各地点の調査を行った。報告日までにアマモ場調査を 17 回、ガラモ場調査を 31 回実施した。

(2) アマモ場マップ作成

背景・目的

対馬のアマモ場に関して公開されている情報はごくわずかである。そのため、島内のアマモ場の現状及び過去のアマモ場の分布について整理し、公表するための情報収集を目的として、聞き取り調査と現地調査を実施した。

方法

アマモの分布に適していると考えられる地点（内湾、河口域）を地図上でピックアップし、現地確認を行った。アマモが確認できた場合は、①干潮時の水深 1.2m以浅…ウェーダー着用の上、水中カメラによる撮影を、②水深 1.3m以深…水中ドローンを用いた遠隔撮影を行い、記録写真とした。アマモが確認できなかった場合は、近隣住民への聞き取りを行い、当該地点にアマモが過去見られたかについての情報を収集した。

調査結果を基に、現存藻場と消滅藻場について Google マップ上で簡易的に面積を算出した。

結果

報告日までの調査の結果、**現存するアマモ場**は島内に少なくとも 14 **カ所**、**消滅したアマモ場**は少なくとも 45 **カ所**あることが分かった。**現存アマモ場は 35,532 ㎡(3.5 ha)**、聞き取りに基づくおよそ **40 年前(1980 年頃)のアマモ場は 394,770 ㎡(39 ha)と推定**される。**この 40 年で、対馬のアマモ場は面積比で約 90%減、地点数は約 70%減少**していることが明らかとなった。また、アマモは対馬で地域名「スゲモ、スゲ、海スゲ」と呼ばれていることが聞き取りを通じて判明し、その後は写真の提示とともに上記の地域名で呼ぶ方がスムーズに情報を得られた。ただ、全島を網羅的に調査し終えた訳ではないため、**今後も調査を進める必要がある。**

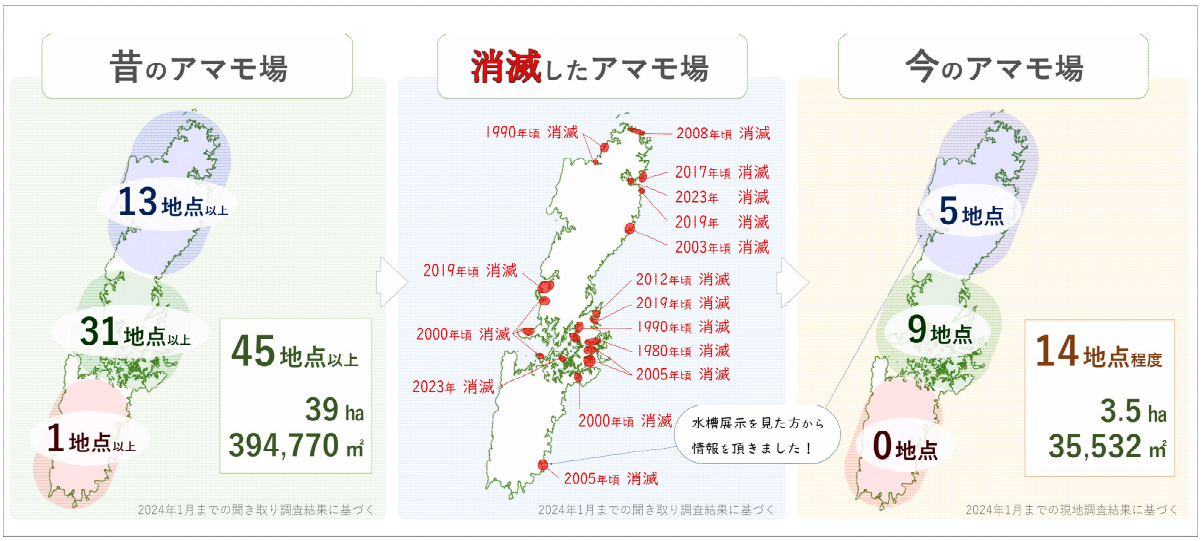


図 1. 報告日までの調査結果を反映したアマモ場マップ

(3) 潜水調査

水産多面的機能発揮対策事業で行われる藻場モニタリングに同行し、SCUBA 潜水による藻場の記録撮影を行った。撮影したデータは協働隊 PC に保存している。実施地点は以下の通り。

上対馬町:豊、西泊

美津島町:三浦湾、鴨居瀬、高浜

(4) 水中ドローンによる藻場撮影

深場のカジメ場の探索やその他藻場の現況を確認するため、水中ドローンによる撮影を 8 地点で行った。撮影したデータは水産課 PC に保存している。実施地点は以下の通り。

上対馬町:西泊 沖の瀬(水深-25m)

上県町 :犬ケ浦(水深-8m)

豊玉町 :綱島 志多浦(水深-5m)

美津島町:久須保 沖堤内側(水深-6m)、緒方 港内(水深-7m)、賀谷(水深-9m)、
鴨居瀬 カセ浦(水深-6m)、黒島(水深-5m)

2. 藻場再生

全島的に減少傾向にあるアマモの生息域外保全を目的として、屋外水槽での栽培試験及び藻場保全組織による移植活動の補助を行った。

(1) 栽培公社の屋外水槽におけるアマモ栽培試験

背景・目的

厳原庁舎玄関のアマモ水槽「しますい」での栽培試験は難航しており、新たな取り組みとして屋外水槽の海水かけ流し条件下におけるアマモ栽培の可能性を探った。アマモの特徴である地下茎の分岐によって株数の増加を図り、移植や保全のための個体数確保を最終的な目標とする。

方法

公益財団法人 対馬栽培漁業振興公社の屋外水槽の一角を間借りし、園芸用プランター3 個を用いて栽培試験を行った。各プランターはそれぞれ砂厚を変え、アマモの生長に好適な条件の検討を行った。砂は「しますい」と同じ市販の海砂を用いてそれぞれ 5 ㎝、8 ㎝、12 ㎝厚とし、元肥として園芸用固形肥料を同量添加した。水槽は連続注水のため液肥の添加は行っていない。各プランター(試験区)には株の分岐していない**アマモを 15 株ずつ植栽**し、令和 5 年 11 月 1 日から試験を開始した。

結果

令和 6 年 2 月 27 日現在、全ての試験区で枯死せずに生長している(別紙 1)。試験開始時に無作為に抽出した 7 株の平均葉長は 23.4±5.8 ㎝(16～33 ㎝)、1 株当たりの葉数は 5.3±1.6 枚であった。植栽から 100 日以上を経過した 2 月 27 日時点での平均葉長は砂 5 ㎝区で 55.8±9.2 ㎝(45～69 ㎝)、砂 8 ㎝区で 63.8±20.5 ㎝(19～91 ㎝)、砂 12 ㎝区で 52.1±22.7 ㎝(14～81 ㎝)であった。1 株当たりの葉数はそれぞれ 5.8±0.9 枚、5.3±0.4 枚、5.1±1.0 枚に増加した。さらに、1 試験区あたりの株数は 5cm 区で **44 株**、8 ㎝区で **65 株**、12 ㎝区で **59 株**と試験開始時から **3 倍程度に増加**しており、目標であった**地下茎の分岐(栄養繁殖)を各試験区で確認した**。特筆すべき点として、砂 5cm 区でのみ、生殖株(花を咲かせる株)が 1 本確認された。いずれの試験区でも、「しますい」での栽培状況(徐々に衰退する)より良好な試験結果となり、**砂の厚みによる大きな差は見られなかった**。一方、葉色が天然海域のアマモと比較して薄いように思われる点については、水槽内では波浪が起こらず、先端部の古い葉先が流失しないためではないかと考えられる。地下茎の分岐の発生機序の解明や夏季の高水温の影響評価等、栽培方法は更なる検討・改良を必要とする。

表 1. アマモ栽培試験の結果

	11月1日		2月27日		
砂厚 (㎝)	株数 (株)	葉長 (㎝)	株数 (株)	葉長 (㎝)	株の増加 (倍)
5	15	23.4 (n=7)	44	55.8 (n=7)	2.9
8	15		65	63.8 (n=8)	4.3
12	15		59	52.1 (n=6)	3.9

(2) アマモ移植活動の補助

東海地区藻場保全組織が実施した賀谷地先から芦浦地先へのアマモ移植試験に関して、採取・植栽の技術的な補助を行った。その後のモニタリングは藻場保全組織で実施しているとのこと。

3.普及啓発

前述の調査結果を基に、海の魅力発信及び磯焼けの現状を啓発する活動を行った。
今年度は特に各教育機関への出前授業と、配布・掲示物の作成に注力した。

(1) 磯焼けパネル展示、リーフレット配布

これまでの藻場調査の結果に基づき、対馬沿岸の藻場の現状や磯焼けについて解説する展示パネル A3判 6 枚（別紙 2）を作成し、「しますい」で掲示している。併せて、アマモについて普及啓発を図るため、A4 三つ折リーフレット（別紙 3）を作成・配布している。

(2) 出前授業・移動水族館

より多くの層へ普及啓発活動を行うため、各教育機関等を対象とした出前授業を企画した。同時に、「しますい」で展示中の生物等を訪問先で展示する移動水族館も実施し、子どもたちの海への好奇心や親近感の更なる向上を狙った。

本年度に訪問した学校は 6 校、計 7 回、その他団体が 2 グループと、昨年度を大きく超える数の出前授業を実施できた。また、河川や海での生物観察会も実施でき、より自然を身近に感じてもらうために活動できたと考える。

(3) おしえて市役所さんでの「対馬のお魚紹介」

対馬市 CATV の「おしえて市役所さん」において、「対馬のお魚紹介」と題し、対馬の海の魅力や磯遊びで注意すべき点を発信している。今年度は「対馬の海藻紹介」と「移動水族館を活用した水産教室」の 2 回出演した。

(4) メディア等への掲載・写真提供

新聞掲載

・読売新聞 2024/02/06「対馬・島おこし協働隊員奮闘、磯焼けで減、アマモ知って」

写真提供

・テレビ朝日「サンデーステーション」：アイゴ漁獲の様子、磯焼けの写真
・BS テレビ東京「Blue Ocean 切り拓け！海の未来」：磯焼けの水中ドローン映像、磯焼けの写真等
・日本離島センター：アオリイカの卵嚢（海藻への産卵、イカ柴への産卵）、磯焼けの写真

Ⅱ　令和 6 年度の活動予定

1.藻場調査

・アマモ場マップの完成、公表　　・藻場調査結果のまとめ、公表

2.藻場再生

・アマモ栽培試験の継続

3.普及啓発

・出前授業/移動水族館の内容及び回数の充実　　・厳原庁舎玄関水槽「しますい」の展示強化

Ⅲ　1 年間の活動を通じて感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

活動を通して感じた対馬の魅力は、自然との距離感が近いことである。海・山と生活圏が近接しており、生活の一部と表現しても大げさではないように思う。その自然の固有性の高さから、日本各地の研究者や写真家が数多く来島している。一方で、距離が近すぎることに起因すると思われるが、環境保全への意識が島外と比較して低いことは来島者からも複数指摘があっている部分であり、対馬の将来を思う上で大きな課題と言える。実際に、対馬の“自然”には不法投棄された大小さまざまなゴミが目につき、対馬固有種の生息環境・繁殖地に地域の子どもたちを連れて観察に行った際にも例外なくゴミ捨て場かと思うような光景が広がっていた。対馬の自然は人の役に立たないゴミ捨て場ではなく、対馬にしかない生物多様性の舞台である。対馬のこれからを生きる子どもたちに胸を張って引き継げる環境を残してほしい。また、SDGs 未来都市でありながら今なお公共工事で河川のブロック護岸を施工中である事実は、非常にもったいなく感じる。

2. 対馬への提案

対馬に今も残る豊かな自然環境は、今後その価値を増していくものと考えられる。国連をはじめとした国際社会の流れとして、経済優先の社会構造や価値観から、自然との共生・豊かさに重きを置いた社会構造へと変換している最中である。短期的な貨幣価値に囚われるのではなく、長期的な視点での発展を検討してほしい。近年の豪雨等の頻発・激甚化を考えると、これまでとは違った治水（例：流域治水、多自然型工法等）の考え方にシフトする時期に来ているとも言える。対馬という土地だからこそ、環境保全と人の暮らしを両立するこれからの公共工事の在り方を率先して示すことができるのではないだろうか。

また、それらの身近な自然が、地域固有性が高く貴重なものであるという認識を広く市民に普及啓発する施設が必要と考える。全国的に環境教育の重要性が説かれる今、対馬の子どもたちをはじめとして、来島者や対馬の大人達も対馬の自然の魅力に（改めて）触れることのできる場の整備を提案したい。その際、普及啓発だけでなく、磯焼け対策を中心とした海洋環境の研究拠点としての機能を持たせた複合施設とすることで、市民への訴求力をより高め、一丸となった磯焼け対策が行えるものと考える。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書

所　　属　農林水産部　自然共生課
ミッション　自然共生チャレンジャー
氏　　名　瀬谷　友啓

Ⅰ　令和5年度の活動成果

有害鳥獣捕獲活動

近年の対馬ではシカが急増しており、農林業や島固有の動植物は深刻な被害を受けている。対馬の自然環境を守っていくためにもシカ対策は必要である。これまで希少な動植物が残るエリアを中心に捕獲活動を行ってきたが、わなの見回りは大きな負担であった。そこで昨年度に引き続き、2 種類の IoT 機器を試験的に導入し、設置後のわなを遠隔モニタリングすることで毎日の見回りの代替となりうるか検証を行った。

使用した IoT 機器

オリワナシステム

長距離のデータ通信を可能とする無線通信技術で、携帯圏外が多い山間部でも広く通信できる。このシステムには以下の 3 つの機器を使用する。子機のマグネットが外れると、通知が来る仕組みとなっている。

・子　機：わなと共に設置され、その作動を親機に発信する。
　　GPSの位置情報も取得可能。
・親　機：子機からの情報を集約してクラウドやメールに情報を送信する。
・中継器：親機と子機の間に障害物がある場合でも、それを迂回して情報の伝達を可能にする。

TREL 4G-R

携帯回線を介して双方向に通信が可能な自動撮影カメラで、撮影された画像や動画、24 時間以内の撮影枚数などをメールで確認できる。またスマートフォンから撮影や設定の変更などの遠隔操作も可能である。このカメラを使用してわなを設置した場所の遠隔モニタリングを行った。

捕獲の成否は、基本的には撮影された画像内に動物の姿が認められたか否かで判断した。ただし画像内に動物の姿がなくとも、撮影枚数が 100 枚を超えるような場合には、わなにかかっている可能性がある。このような場合にはカメラの遠隔操作を行い、再度現地の様子を撮影することで捕獲の成否を判断した。

結果

シカ１頭とイノシシ１頭を捕獲した。昨年度に引き続き、美津島町濃部での捕獲活動を重点的に行った。濃部には絶滅の危機に瀕する希少種チョウの生息地が残るが、近年はシカによる植物の食害が目立ち始めたため、防護柵で囲った広域的な保護区を設置している。昨年度９頭のシカを捕獲した影響により、警戒心は高まっているが、保護区内の環境回復を図るため捕獲活動を行った。下記に捕獲活動を示す。

作業期間		場所	罠設置期間	罠設置日数	最大罠設置数	捕獲努力量	通知	結果
R５年度	4/20-4/26	神崎半島	4/20-4/26	6	5	30わな日	TREL 4G-R	ー
	6/13~6/23	美津島町濃部	6/13~6/23	10	3	25わな日		イノシシ1頭
	7/6~7/31		7/6~7/31	25	6	134わな日	オリワナ・TREL	ー
	7/20~9/8	小鹿	8/30-9/8	9	5	45わな日	TREL 4G-R	シカ1頭
	11/27~12/27	美津島町濃部	11/27~12/27	30	5	80わな日		ー
計	ー	ー	ー	ー	ー	296わな日	ー	イノシシ1頭・シカ1頭

捕獲努力量(罠数と設置日数の積)

オリワナシステム

たこ糸で罠と繋げ、罠作動後に捕獲個体が動き回ることによって繋がった子機のマグネットが外れて、捕獲通知が来る仕様とした。しかし、水分が多い土や雨など悪天候が続くとたこ糸が２週間足らずで切れてしまった。捕獲通知システムが正常作動するように、設置環境に応じた仕掛けの点検が必要。

TREL 4G-R

罠設置後の捕獲の有無だけでなく、捕獲前の準備段階においても負担軽減に繋がった。メールで確認できるカメラの情報により、シカの訪問頻度や、餌を用いた誘引捕獲を行う場合にシカがどれだけ餌を食べているのか、足を運ばずとも現地の様子を知ることができ、効率的に捕獲準備を行うことができた。

囲いわなの実証実験

従来の囲いわなは、侵入部分のゲートの鉄製の扉を落下させることにより、複数個体を一度に捕獲することが可能な大型のわなである。しかし、捕獲の際に「ガチャン」と大きな音を立ててゲートが閉まるため、捕獲されなかった周辺のシカの警戒心が高まり、捕獲が難しいシカを増やしてしまう。そこで、侵入部のゲートを潜り込み式にすることで、捕獲時に大きな音を立てず、シカの警戒心を高めない捕獲が可能となる。和歌山県果樹試験場での取り組みを参考に、運搬・設置が容易な対馬に適した囲いわなの実証実験を行った。

潜り込み式囲いわな

防護柵の穴や隙間から農林地に侵入しようとするシカの習性を利用したもので、ゲート下部の隙間からわなの内部に潜り込めるが、一度内部に侵入したシカは外に出られない一方通行の仕組みのゲート。大きさは、幅 2m×奥行 4m×高さ 2m。

資材

単管パイプ、防鹿ネット、弾性ポール、単管用クランプ、ロープ、結束バンド等

① 場所の選定（8 月～9 月） 厳原町・峰町・上対馬町の国有林内、志多留

囲いわなも同様に TREL 4G-R を利用して遠隔モニタリングを行う。そのため、携帯圏内、シカの生息密度が高く、道路から資材の運搬が容易な場所を探して調査を行った。ヘイキューブによる誘引とカメラ調査を行った結果、志多留において 2 地点（地点A、地点B）を候補地として決めた。

② 囲いわなへの順化（10 月～1 月） 志多留

地点Aと地点Bにおいて、餌のみを置いた状態からシカの反応を見て、段階的に囲いわなを組み立てた。餌はわなの中と周囲に置き、4 日に 1 回程度の頻度で誘引を行った。

③ 捕獲開始

地点Bにて 1 月 17 日より入口に潜り込み式のネットを設置して、捕獲を開始した。

地点A

10 日程で警戒心が薄まり、次の段階へと進めた。単管パイプを組み立て終わり、わな側面をワイヤーメッシュで覆った後、シカが来なくなった。しかし、100m 程離れた場所にはシカが写るため、ワイヤーメッシュを警戒して来なくなったと考えた。ワイヤーメッシュを外し、しばらく様子を見たが来る気配がなかった。そのため、地点Bでの捕獲に移行した。

地点B

地点Aと同時進行で誘引とわなの組み立てを進めていた。こちらは、わなの側面に防鹿ネットを用いた。地点Bはわな側面を覆っても、シカが警戒することなく餌を食べにわなの中へ入って来た。1 月 11 日に資材を移動させ、捕獲場所を地点Aから地点Bへと変更した。1 月 17 日に入口の潜り込み式のネットを設置して、捕獲を始めた。

捕獲

入口を潜る気配がないため入口の高さを上げて行き、シカにとって安全に出入り可能な場所だと学習させたのちに、捕獲可能な高さへと調整することとした。高さ 10cm から始め、70cm にした際にわなの中へと入るシカの様子が確認できた。

以下、囲いわなのスケジュールを示す。

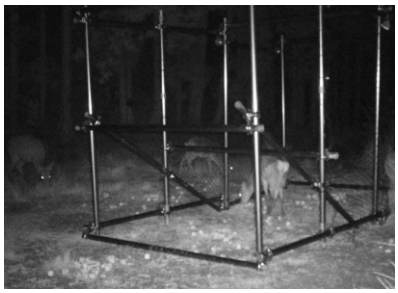
志多留	わなの状態	
	地点 A	地点 B
10月16日	地面に単管4本を並べる	-
10月25日	単管で立方体型を組む、箱罠を置く	-
10月30日	-	地面に単管を並べる
11月2日	-	単管を増やす
11月7日	直方体型、側面にワイヤーメッシュを設置	立方体型、ネットで囲う
11月10日	出入口にネットを設置	-
12月1日	出入口のネットを回収	-
12月13日	側面のワイヤーメッシュを外す	-
12月26日	-	入口高さ1mの位置に単管を追加
1月11日	地点 A を解体し、地点 B に直方体型 + ネット（入口を除く）	
1月17日	-	入口もネットを張り、捕獲開始
1月22日	-	修正：入口の高さを0cm→10cm
1月26日	-	修正：入口の高さを10cm→30cm
2月7日	-	修正：入口の高さを30cm→70cm

地点A

左から 10/16:地面に単管 、10/25:立方体型 、11/17:直方体型+ワイヤーメッシュ。

地点B

左から 1/12:直方体型+ネット、1/17:潜り込み式の入口を設置、2/10:入口の高さ 70cm。



囲いわなの今後

シカの反応を確認しながら、捕獲可能な高さへと調整を行い、今年度中の捕獲を目指す。

その他の活動

・第一種銃猟免許取得

・生物多様性保全への取り組み　希少種チョウ保全エリアにて防護柵の点検と補修

・豆酘中学校　講演（7 月 14 日）

・協働隊フェス（2 月 11 日）　狩猟体験（くくり罠）・ポスター発表

シカ捕獲の際に使用する罠道具の展示や体験と、協働隊の活動報告をポスター形式で発表した。来場者の方には、シカの生態やくくり罠を設置する際の注意点の説明を行い、くくり罠の作動を体験してもらった。イベントには出展者も含め 344 人が来場した。

・対馬学フォーラム（3 月 17 日）「ICT を活用した対馬におけるシカ捕獲活動」

Ⅱ　今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動

退任後は、JICA海外協力隊として南米のエクアドルに派遣予定である。派遣先では、地域住民に対して環境に対する意識向上のための啓発活動を行う。対馬での 3 年間の有害鳥獣捕獲等の経験を活かし、活動を行いたいと考えている。

2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項

・ジビエの利活用の促進

年間 1 万頭を超えるシカ・イノシシの捕獲があるが、利活用される割合が低い。捕獲者や一般の消費者に対して、ジビエの利点や適切な取り扱い方法について定期的に普及啓発を行う。ジビエの価値を理解することで、利活用する人がより増えると考える。

・狩猟の重要性や魅力の普及

狩猟者の高齢化が進んでおり、若い世代の狩猟者を増やすための啓発活動が必要だと感じる。狩猟による自然保護への貢献や経済的な利益など、狩猟の重要性や魅力を広く伝えることで、新規狩猟者を増やして行く必要があると思う。

Ⅲ　3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

対馬の魅力は自然と景観だと思う。海と山との距離が近く、貴重な生き物が暮らし、素晴らしい景色が広がっている。しかし、山の中へ入ると急増したシカによる影響で下層植生は深刻な

被害を受けている。下層植生のない地域では、生態系のバランスが崩れ、生物多様性や生態系機能が低下する可能性がある。魅力的な対馬であり続けるためにシカの個体数の適切な管理など、継続した対策が必要であると思う。

2. 対馬への提案

対馬の自然を未来に残す

自然なくして、対馬の魅力を語ることはできないと思う。しかし、今日ではシカによる影響で雑草と言われていた植物ですら姿を消している。対馬の方から「昔はここに〇〇があった」という言葉を聞くたびに寂しく感じる。素晴らしい対馬の自然をより多くの人に伝えるためにも、シカ対策は今後も続けて行く必要があると考える。

対馬では狩猟者の高齢化が進み、狩猟者の減少に伴いシカによる被害がより深刻な状況になる可能性がある。シカが対馬へ与える影響を他人事ではなく自分事として考え、狩猟者だけではなく、多くの人々に関心を持って欲しいと思う。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書

所　　属　しまづくり推進部　地域づくり課
ミッション　コミュニティ支援担当（北部）
氏　　名　庄司　絵里加

Ⅰ　令和5年度の活動成果

1. ダンスを通じた地域活性のための取り組み

(1)　北部エリアの教育機関でのダンス指導

昨年度に続き今年度も教育機関等でのダンス指導のサポートを行った。具体的な活動内容としては、比田勝小学校５，６年生の運動会のダンスの振り付け及び構成の作成と指導、仁田小学校クラブ活動でのダンス指導、子育て支援センターアップルかみつしまでの「親子ダンス教室」（毎月一回実施）、協働隊フェスでのダンスワークショップ等を実施した。実施する中で、普段ダンスに触れていない子どもたちも楽しそうに踊ってくれたり、自由に体を動かして自己表現してくれたりと、子どもたちの想像力の広がりや発散の一助となりうると感じた。今後も教育機関等での活動を続けられるよう機会の創出や改善に努めたい。

↑比田勝小学校の授業で、ダンスを披露している様子。

また今年度は、子どもたちへの活動により着目し、ベイビーシアター（乳幼児またはその親子を対象とした舞台芸術）の先進地視察を実施した。乳幼児にも舞台芸術を観る能力があるという研究結果もあり、乳幼児から舞台芸術に触れるメリットなどについても学んだ。対馬では、おおよそ小学生以上を対象とした舞台芸術作品の招致はあるが、乳幼児を対象とした舞台作品については殆どないそうだ。今後、対馬でのベイビーシアターを実現することで、子育て支援や子どもたちの文化活動への新たな可能性を広げていきたい。

また、3 月には「コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクール」にも参加する。心を豊かにする舞台芸術に、誰しもがアクセスできる環境づくりをめざしたい。

(2) 上対馬総合センターでの自主講座「ロックダンス教室」の運営

（業務外であるが、「ダンスを通じた地域活性化」に関わりうる成果を記載する）

初年度から継続しているロックダンス講座を、今年度も引き続き運営した。今年度からは新たに「大人クラス」も設け、「リトルキッズ」「入門」「LOCK」と合わせ全部で 4 つのクラスを展開。各クラスとも年齢やコミュニティも違う仲間が一緒になってダンスに取り組んでいる。またお祭り等のステージ発表では一丸となって楽しんだり、お互いのダンスを応援したりすることで、新たな刺激や絆ができてきているように感じる。上対馬でも育ちつつあると感じるダンスの文化やその輪を、今後もみんなで楽しみながら育てていきたい。

2. YouTube チャンネル「えりやん Tube」での対馬暮らしの魅力の発信活動

対馬の対外への認知を広めるため、また対馬市民にもその魅力を再認識してもらうため、初年度より YouTube で対馬暮らしを発信している。

20 代女性移住者の目線で、国境マラソンや SUP などの体験コンテンツから、生活密着、道歩き、狩猟など、対馬の暮らしの魅力等を発信。発信を始めて 2 年 1 か月が経った令和 6 年 2 月時点での視聴回数は約 11.3 万回、総再生時間は 5,683 時間、チャンネル登録者数は 765 人になった。

視聴者からのコメントでは、対馬出身者と思われる方々から「動画みて、また帰りたくなりました」「対馬が懐かしく、対馬の動画を探して回っています、これからも楽しみにしてます」等、映像から対馬を懐かしく思う言葉を多くいただいている。動画で対馬に思いをはせてもらい、関係人口の増加やＵターン移住のきっかけに繋がれば嬉しい。また出身者以外からのコメントも多数いただいている。対馬を知り、より身近に感じてもらえるきっかけ作りを目指している。

活動の手ごたえは感じるのだが、継続するうえで課題と感じているのが、編集にかかる時間だ。対馬には発信したい魅力が多く、面白い動画はたくさん撮らせていただいている。しかしその見せ方の追求や他の活動時間との兼ね合いの中で、納得できる状態に編集して発信するには撮影してからかなり時間がかかっている状況だ。YouTube での発信活動も退任後にも続けていきたい活動だが、スケジュールの中にどのように撮影・編集の時間を組み込むのかは工夫していかなければならないと感じている。

↑一番視聴回数が多い動画は 5.8 万回を超えた。

3.　定住に向けた活動

任期の最終年度に入り、協働隊の業務内外で定住に向けた活動にも力を入れてきた。

(1)　ダンス教室の継続、拡大（個人の活動として）

初年度より協働隊の活動として実施してきたダンス教室を、退任後も継続するために有償化し、今年度より個人の活動に切り替えて実施。参加無料だった昨年度の申し込み人数は最大 33 名だったのに比べ、現在子どもたちのクラスは 14 名と減少したが、これだけの子どもたちと家族が、価値を感じて続けてくれていることを嬉しく思う。

また今年度から大人を対象としたクラスも開設。現在 11 人にお申し込みいただき、それぞれのライフスタイルに合わせて取り組んでいただいている。また、他にも 2～3 才の子どもの親御さんや、中学生からも問い合わせをいただいている。今後も試行錯誤しながら、ダンスの場を提供していきたい。

↑佐須奈にぎわい祭りにて、ダンス発表後の集合写真。

(2)　事業の開拓

退任後はいくつかの仕事を並行して行う「パラレルワーク」という形で定住できればと考えている。ダンサー事業に加えバスガイド、ケーブルテレビのリポーター、ネイル施術の仕事を検討。バスガイドとリポーターは少しずつ実務経験を積むことができ、退任後も継続して活動できそうだ。またこの二つの事業には、伝えることや楽しませること等エンターテイメントの面で共通する部分があるため、自身のスキルアップや事業拡大にも繋げていきたい。ネイル施術については、まだ研究段階ではあるが、対馬に多く漂着する海洋プラスチックごみを活用したネイルアートができないか現在検討中。ネイルを通じた啓発活動も事業の一つとできるよう進めていきたい。

4. その他

(1) 比田勝小学校 6 年生　ふるさと学習「対馬活躍人講座」 講師

(2) イベントでの司会業務（おっどん祭り、対州馬シンポジウム、豊崎神社大祭等）

(3) 第 1 回協働隊フェスの開催（ダンスワークショップとマルシェを担当）
(4) SDGs カフェプレゼンター（10 月 17 日） 等

Ⅱ 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動

(1) ダンス教室の運営

ダンス教室の継続と改善・拡大に向けて取り組む。北部地域でも徐々に育ってきたダンス文化をより深めていきたい。将来的には航路で繋がっている韓国の方々ともダンスを通じて交流ができればと考えている。

(2) ダンスを用いたアウトリーチの活動

これまで協働隊として行ってきた教育機関でのダンス指導に今後も携われるよう、積極的な情報提供にも力を入れる。また、ダンスを習いたい人だけでなく、市民の方（年齢や身体的能力等問わず）がダンスや舞台芸術の機会により触れやすい環境づくりも検討したい。心を豊かにする舞台芸術に、誰しもが触れられる機会や仕組みを作っていきたい。

(3) 伝える仕事

YouTube を含む SNS での発信活動やバスガイド、リポーターの仕事を通して、対馬の魅力を伝え、自身のスキルアップや事業拡大に繋げたい。

(4) ネイル事業

比田勝でネイルアート施術を提供できるよう活動を進める。また、問題提起・啓発を目的とした海洋プラスチックごみを使用したネイルの検討も進める。

2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項

(1) 市の文化施設の管理及び運営

北部エリアでの文化活動を通じたコミュニティ支援事業を行う上で、上対馬総合センターの存在はかなり大きかった。みんなで集まって練習するにも、その成果を発表するにも欠かせない存在であり、いつも快適に使用させていただき感謝の念に堪えない。今後も総合センターを活用し、文化協会の他団体とも協力しながら、心の豊かさを育む場をより広げていきたい。

Ⅲ 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

対馬の魅力はなんといっても「人のあたたかさ」だと感じている。対馬に移住して 2 年半が経った。この 2 年半で本当にたくさんのことに挑戦させていただいた。ダンスを用いたコミュニティ作りに YouTube の活動、狩猟、消防団、釣り、SUP、駅伝等、対馬に来ていなければ経験していないことがたくさんだった。新たな経験を積ませていただき、対馬のことがより好きにな**った**

し自分の可能性も広がった。

こうしてたくさん挑戦できたのは、他でもない応援してくれる地域の皆様のお陰である。やってみたいことがあるとき、必ず誰かが力になってくれた。親身になって相談に乗ってくれたり、動いてくれたり、申し訳なくなるほどありがたかった。地域の方々同士でも助け合い・支え合いの場面を見ることは多かった。当たり前のように人のことを想い、動ける対馬の人々のあたたかさは、本当に素晴らしいと感じると同時に、私もこのご恩を返していけるよう、あたたかい人でありたいと思う。

課題に感じるのは、昨年も挙げていたが、対馬の島の広さゆえに文化芸術の機会の平等性に欠けるところだ。人口の多い厳原での機会を多くすることは妥当だと思うが、既に島内にある素敵な文化や関係団体、各地域の施設などを掛け合わせることで、島内各地での機会創出が実現できるのではないかと考える。

2. 対馬への提案

対馬には活発に活動している文化団体やアーティストも数多くあり、必ずしも文化面で遅れているわけではないと感じている。それぞれの良さをかけ合わせたり協力したりすることで、島内各地での舞台芸術作品の公演を継続的に実現できるのではないかと考える。既にその分野でご尽力いただいている方々もいらっしゃる中で、私はこれまで対馬であまり機会がなかったベイビーシアターの機会創出に取り組んでいきたいと考えている。文化芸術の持つ力を借りて、より心を豊かに、より良い未来に進む一助となれるよう今後も取り組んでいきたい。

これまで皆様にいただいたご恩をお返ししていけるよう、今後も自分にできることを精一杯頑張りながら、引き続き大好きな対馬での暮らしを楽しんでいきたい。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書

所　　属　地域づくり課
ミッション　コミュニティ支援担当（南部）
氏　　名　大野　亜寿沙

Ⅰ　令和５年度の活動成果

1. 空き家バンクサポート

空き家バンク登録予定物件の現地確認に同行し、間取り作成のサポート、所有者（代理人）より物件に関しての情報確認を行い、入居希望者に伝えるべき項目の整理を行った。

これまでの空き家バンクでは、情報の整理・確認ができていないことが多く、担当者の判断のみで内覧希望者に誤った情報や、不確定な情報を伝えてしまっていることが多いように感じていた。実際に、以前空き家バンクの内覧で来庁されていた移住者をフェリーで見かけ声をかけた際に、情報がいい加減すぎると不満の声を聞いた。この移住者は空き家バンクで探すのをやめ、自身で空き家を探し交渉を行い移住されていた。

現地確認の同行時で所有者の立ち合いがある場合、高額と思われる取引価格を設定している所有者に対しては金額に関しての助言を行っている。助言に関しては具体的な金額ではなく、空き家バンクの本来の目的である移住者への住居の提供、対馬での平均的な給与（給与に関してはつしま企業ガイドブックやハローワークに掲載されている企業で平均を取った金額）、転職を伴う移住をしてきた移住者ではローンを組むことが難しいということを伝え、交渉に関してはある程度の融通を利かせてもらうようお願いしている。

2. 移住定住サポート

(1) 移住定住

空き家バンク対象外の方の家探しサポートを行った。

OB の帯金隊員が定住に向け住む場所を探していたがなかなか見つけることが出来なかったためサポートを行い、帯金隊員の希望地区である阿連にて賃貸物件を見つけることができた。補修に関して支援金を利用するとのことだったため、5 年以内に所有者より退去の申し出がでない内容にて契約書を作成した。この他にも直接依頼がきた人に対して空き家の紹介、地域の人の紹介を行った。

移住者等の家探しに関しては家を探すだけではなく、地域の方とつなげるということも意識している。地域の方は区長や、同じような趣味を持つ人をつなげており、区長からは事前に紹介してもらい話をすることで、どのような人が来るのか安心できる、移住者からは地域への入口を作ってくれることは非常に助かると言っていただけている。現在対馬市では移住に

対しては空き家バンク等でサポートはしているが、転勤してきた方や、転勤後に定住しようとした際（転勤後に対馬へ定住したいと考え単身赴任を選択される方等）のサポートがほぼない。このような方のサポートは本来市役所が行うことではないかもしれないが、転勤者が対馬の素晴らしさを感じ定住したいと思った際のサポートは市役所職員ではなく地域おこし協力隊だからこそ出来るサポートであると考え個人的にも続けていく予定である。

(2) 契約書作成サポート

空き家の紹介を行った人に対しては、契約書の作成や内容確認のサポートを行った。契約書に関してはひな形を用い記名・押印をするだけの賃貸借契約ではなく、契約内容をしっかりと把握してもらい、まずは自身で契約書の作成を行ってもらった。作成された契約書がどちらか一方のみに有利になっていないかの最終ヒアリングを行い、契約内容の説明、書面として残すべきことはないか確認し、相手方に了承をとってもらい契約を行うようサポートを行った。これは、契約書は個人間契約において重要な役割を持ち、且つ不動産での揉め事の行きつく先は裁判であり、トラブルになった際には自分自身で対応することが必要となるためである。この他にも活動する中でお世話になった事業者の方より親戚が島外事業者と賃貸借契約を結ぶ際の契約内容確認、最終的な内容説明依頼されることもあり、賃借人ではなく、賃貸人の立場に立った契約サポートを行うこともあった。島外事業者との契約はやはり不安が大きいようで、契約内容の説明の際には所有者だけではなく、所有者の子と親戚も同席されていたが、契約内容をわかりやすく説明したことで安心して契約をすることができたと言っていただけた。

契約書等のサポートや内容確認に関しては、現在知り合いベースでのみ行っている。業として行っていないため折衝交渉は行っておらず、そのことを理解してくれる方のみ対応している。今後に関してもこのスタイルは変えることなく続けていく予定である。

(3) 視察：鹿児島県奄美郡龍郷町「あまみ空き家ラボ」

「あまみ空き家ラボ」は奄美大島にて未登記物件や老朽化物件など、不動産での取り扱いが難しい空き家を活用する「空き家サブリース事業」や移住希望者が島暮らしを体験できる「お試し暮らし住宅」の運営、島外在住の不動産所有者などを対象にした「空き家の貸し方講座」開催などの活動をしている。

現地視察では、実際に運用しているサブリース物件やDIYを含めた改修を行っている物件、二地域居住者の住まいの活用、情報の発信方法等「あまみ空き家ラボ」で行っている空き家活用方法の視察を行った。通常では取引が難しいと思える物件も紹介を行っていることに驚いたが、奄美大島は移住を考える方に人気の土地であるということに加え、物件や地域の魅力を見つけ情報の発信を行うことで成約させていた。

空き家ラボの物件情報は有料会員となることでしか見ることができないが、このことは料金を払ってまで情報が欲しい本気の移住希望者のみが閲覧していることになり、情報を出せ

ばすぐに決まっていくという成約率の高さに直結する理由であると考えられる。

「あまみ空き家ラボ」は奄美群島だけでも80軒以上のサブリース物件をもっており、地区からも小学校存続のために移住者を呼び込んで欲しいと依頼を受ける等、地域に根付いた団体であった。

奄美大島の視察では空き家の改修に関しては家の構造の違いから対馬で同じようなことをするのは難しいと感じることもあったが、非常に学びとなる視察であった。

(4) 空き家改修イベント:空き家再生塾 in 佐須奈

前年度に研修に伺った NPO 法人頴娃おこそ会の加藤氏を招き佐須奈でDIYイベントを実施した。

一般社団法人 MIT が国土交通省「空き家対策モデル事業」のソフト事業に採択されたことを受け、話を伺い宅建士としてアドバイザー的役割で事業に参加した。当初の計画ではデザイナーを入れたり、改修は工務店に依頼したりという継続的に多くの資金が必要となる計画であったため、持続可能な空き家改修として加藤氏が行っているコミュニティ大工の手法を提案し、MIT の吉野氏とコミュニティ大工の加藤氏を繋げ、佐須奈にて空き家改修塾というDIY イベントを 4 日にわたり実施した。DIY イベントでは県の視察も含め、連日 10 名程の人が集まった。イベントではこれまで工具を触ったことのない人がほとんどであったが、1 日が終わるころには丸鋸等の工具を使い資材を切ったり、インパクトドライバーを使いこなして作業を進めることが出来るようになっていた。

今回のDIYイベントで気が付いたことは、このようなDIYイベントはチームビルディングに非常に向いているということであった。初めて会う人でも同じ作業をすることを通じ、出来る部分を担当し、お互いに教えながら作業を進めることはチームとして動くということの良い学びになり、今まで見えなかった新たな部分を見つけることができる作業であると感じ、コミュニティ大工の手法の新たな活用ができるのではないかと感じた。

(5) その他

子ども演劇運営サポート

祭り等の地区行事サポート

イベントサポート

地域おこし協力隊研修参加

Ⅱ　令和 6 年度の活動予定

1. 空き家改修

(1)　定住に向けた活動

定住のための住居の改修を行いつつ、これから移住しようと考えている方の参考になるよう、改修作業を SNS 等で発信していく。

(2)　空き家改修実践塾

コミュニティ大工の加藤氏を招いたイベントを 4 月に実施予定。

2. 耕作放棄地活用

(1)　耕作放棄地を探し賃貸交渉

(2)　耕作放棄地の整備

(3)　耕作放棄地を放牧地として山羊の飼育を行い、ふれあい体験等の実施を目指す。

3. 空き家バンクサポート

今年度と同様に空き家バンクのサポートを行っていく。

Ⅲ　1 年間の活動を通じて感じたこと

島外の人では警戒されて空き家探しなんてできないといったことを何度か耳にしたことがあるが、私自身そのように感じたことはない。その地域に足を運んで地域の人ときちんと話せば空き家情報は入手できる。他にも、この地域は難しい、閉鎖的だといったことを聞くこともあるが、実際に地域の方に話を聞きながら空き家探しをしている際にはそのように感じたこともなく、閉鎖的と言われる地区に移住した方をみても、地域に溶け込み若い力でその地区を活性化させている方もいる。どこに移住するのかではなく、誰が移住するか（人柄）が大事ということである。このことから、地域に先入観を持つのではなく、自分自身で確認をしていき尚且つ慎重にマッチングしていくことが必要であると考える。

空き家改修イベントでも、素人がした改修なんてという言葉も聞こえてきたが、居住する人が施主となり進めていく改修では、みんなが楽しみながら作業を進めていくことができ、尚且つ施主自ら改修に携わることで家の問題点、解決方法等も一緒に学んでいけることから改修業者が不足している対馬において、コミュニティ大工の手法での空き家改修は有効ではないかと感じた。この活動が続いていくことは、今後の移住のハードルを下げることにつながり、対馬の空き家の活用にもつながっていくのではないだろうか。

前年度は、様々な人に会うことを意識して活動していたが、今年度は知り合った人たちを繋げるということを意識していた。同じ趣味の方をつなげた際には双方ともにとても喜んでいただけ、「このような活動こそコミュニティ支援がすべき活動だね」と言ってくれる方もおり、前年度にお世話になった方たちに少しは恩返しができていれば嬉しく思う。

次年度は、今後住む家の改修、引っ越し、耕作放棄地の活用等、新たなことへのチャレンジを始めます。今まで以上に様々なことを相談させていただくことになるかと思いますので引き続き宜しくお願い致します。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書

所　　属　上対馬振興部地域振興課
ミッション　北部対馬活性化プランナー
氏　　名　橘田　ゆかり

Ⅰ　令和５年度の活動成果

1.「つしま森の教室」(こどもの自然体験コミュニティ)運営

(1)　イベント企画／運営について

「つしま森の教室」は昨年度海士町で視察した、森のようちえんを参考に2023年4月より始めた、地元／移住者／転勤者の交流機会の提供や、対馬の子育て魅力発信を目的として始めたこどもの自然体験コミュニティ。

(※「森のようちえん」にはフルタイムの保育園型／認可・認可外／週末イベント型などさまざまな運営形態があり、現在対馬では、イベント型として企画運営をしている。)

対馬転勤者から、「引っ越し後、対馬を楽しめるようになるまでに、時間がかかる」「いろいろ子供とできることがあるのであれば、もっと早く知りたかった」といった声があったことなどから企画。令和 5 年度初めに、比田勝こども園保護者数名で集まり、企画の方向性や趣旨を共有し、以降月 1 回程度の企画を運営している。

1 回目から対馬青年の家の職員の方に、ほぼ毎回協力していただいており、幼児向けイベントのため、現場での安全管理や企画運営に寄与していただいている。青年の家では、宿泊型、一日型の企画が多いが、幼児向け 2 時間程度のイベント企画や、SNS を使った情報発信などが参考になるとのことであった。

また、青年の家も限られた予算で企画を運営されているため、対馬の子供たちのために、今後も協力して企画を運営していければと思う。

(2)　課題

子供たちの自然体験は、地域の方のご協力もあり、さまざまな企画を実施することができた。一方、参加者同士の交流機会の提供、場作りについては課題が残る。参加者から、「交流機会としては、昼食も合わせて提供するのはどうか？」と言った声があったため、今後検討できればと思う。

また、つしま森の教室は、社会福祉的な要素が大きく、収益を上げるような性質のプロジェクトではないと考えている。協働隊任期後は、どのように継

続していけるか、対馬市やその他関係団体、関係者などとも相談することができればと思う。今後は、北部対馬の立地を最大限活かし、韓国の子供たちにも参加いただき、国際交流も含めた活動としてもプロジェクトを広げていきたい。

(3) イベント開催実績（下図の通り）

つしま森の教室活動実績　　島おこし協働隊　橋田

回	日付	内容	参加者（大人）	参加者（子供）	合計	事前準備	参加料	韓国語教室（申さん）	講師	振り返り／備考
1	2023年4月16日	しいたけ菌打ち	15	10	25	原木運び（橋田、福山）	¥0		武末さん	菌の駒が足りなかった。（購入数1100）幼児もかなり菌打ちは可能。
2	2023年5月5日	さくらんぼ収穫	11	10	21	駐車場確認	¥0		三原さん	雨天後でどろどろだったので、長靴でよかった。河内のお花、庭園もその後見学させていただいた。
	2023年5月7日	たけのこ掘り			0					雨天CXLとなった。
3	2023年6月4日	梅拾い	17	15	32	持ち帰り料金の確認。梅活用レシピヒアリング＆印刷。	¥0	○	武末さん	講師が梅干しのサンプルを用意してくださっていた。他にも梅ジュースを用意してきてくれた方も居た。個人で袋は用意。韓国語教室で学んだ単語をその後子供たちがよく覚えている。
4	2023年6月10日	どろんこ遊び	10	13	23	田んぼの確認。駐車の向きの設定。	¥0		春日亀弘毅さん	
5	2023年7月2日	海の生物観察	22	25	47	雨天予報だったため、現地確認。釜坂隊員から漁協に連絡。	¥0	○	釜坂隊員	午後開催。転んだりする人が多く、今度は、長袖長ズボンと案内。韓国語講座には人数が多すぎた。みんなで水槽を作り、普段各家庭では観察できない生物もみることができた。
6	2023年8月27日	川の生物を観つけよう！	16	15	31	トイレ確認、川の天気確認、ライフジャケットレンタル（仁田小学校）畑島先生準備（トレー、網、ライフジャケット大人用）、釜坂さん水槽	¥0	○	佐須奈小学校畑島先生	CATV取材有。講師向けにマイク用意検討。お菓子のお土産があったこともあり、参加料をとっていいのに、という声があった。参加者のママ同士も交流があった。
7	2023年9月3日	対州馬とふれあおう！（一回目）	12	11	23	事前のコンテンツ検討、農協保険加入手続き／周知、対州馬協力依頼文作成	¥100		協働隊　中屋隊員、吉原隊員	パパの参加が多く、運営のサポート（乗馬時のささえ）をいただけて助かった。9月頭だと、まだ気温が高すぎた。えさやり、対州馬クイズ、乗馬、かけっこ。
8	2023年9月24日	対州馬とふれあおう！（二回目）	13	9	22	市の保険適用。一日の流れを中屋隊員と調整。	¥0		協働隊　中屋隊員、吉原隊員	気温は適温。青年の家さんに、アイスブレイクゲームをお願いし、あらたな試みとした。幼児にもわかりやすいゲームをするのが、難しかった。馬運車にこども達は一番喜んでいた。
9	2023年11月19日	つしま大石農園でゆず狩りをしよう	12	12	24	参加者のリストを事前に作成することになった。次回から、申し込み時に名前など要確認（今回参加者制限25名）	¥0		大石夫妻	銀行の方もお手伝いとしていらっしゃった。紅茶の試飲。運営を将来的に一人ではなく、グループでしていけるようにできるといい。
10	2024年2月11日	（協働隊フェス）火おこし体験	30	30	60	まいぎり式火おこし、ファイアースターター、麻ひも、マシュマロ、シャボン玉を購入。事前に青年の家職員とともに練習。	¥0		橋田、青年の家職員3名	個別企画での人数カウントはしていないが、来場者は344名。多くの方が、火おこし体験に参加してくださっていた。マシュマロがすぐになくなってしまったため、提供のタイミングは要検討。
累計参加者数			158	150	308	韓国語教室開催数		3		

2. 観光 PR 関連

(1) Google マップ情報登録／SNS 運営

昨年度から継続している Google マップへの情報登録は、2024/2/21 現在閲覧が 546 万回となり、昨年の活動報告時の 68 万回から大きく数値を伸ばした。Google マップは自動翻訳された言語がデフォルト表記されるため（Instagram は「翻訳」ボタンを押さないと翻訳されない）韓国人旅行客の閲覧もかなり多いと予測している。

SNS は、現在 Instagram5 アカウント、Facebook（Instagram とおおよそ連動）、note（ブログ）を運営。メインの Instagram では、今年度も対馬振興局（対馬北部の魅力再発見）、立教地域活性化グループ（首都圏ワカモノ目線での情報発信）など連続企画を継続。対馬の絶景と女性の後ろ姿を投稿する「対馬の女（ひと）プロジェクト」では、対馬在住カメラマンの城崎氏に協力いただき、撮影、観光 PR を行った。また、Instagram アカウント（観光物産協会、対馬北部、観光情報（英語）、移住）の紹介ポスターを制作し、空港、港などに掲示を依

対馬市島おこし協働隊　橋田（たちばんだ）ゆかりさん

「よそもの」目線で発信

あの人この人

画提案に取り組む。地元職人らの協力を得て昨年末、比田勝港国内ターミナルに地元産ヒノキで作ったスマートフォン用撮

頼。観光地図制作（比田勝おさんぽマップ）とともに、新聞にも取り上げていただいた。

(2) 国際ターミナル窓口業務

週 1 日程度、比田勝国際ターミナル窓口業務に従事。主に韓国人旅行客の窓口対応（観光案内、両替、バス券販売）、掲示物の英語翻訳を行った。旅行客と直接交流することのできる場所に出ていくことは、退任後の事業検討の良い材料となっている。

3. 協働隊全体に関連する活動

- 対馬市 HP への協働隊プロフィールページ新設（市民、協力隊交流のきっかけ作り）
- 協働隊 Instagram アカウント開設（国内他地域の協力隊との交流、将来の対馬協働隊への引き継ぎ（これまでは Facebook のみ。着任後の PR サポートとなることを想定）
- 活動報告会の開催形式変更（フェス形式とし、より市民の方と交流できるように変更。2/11 青年の家にて開催、来場者 344 名。隊員同士の共同プロジェクトとしても機能した）

4. 先進地視察

- 千葉／全国地域おこし協力隊・集落支援員初任者研修
- 仙台／Moriumius（震災エリアでの廃校利用、子供の自然体験事業、宮城オルレ）
- 対馬／長崎県協力隊研修（対馬協働隊はバス内で活動発表を実施、資料配布）
- 五島列島／英語ガイド、DMO 設立（海業に関連して 3 月対馬に関係者来島予定）
- 滋賀／地域が稼ぐ観光戦略（全国市町村国際文化研修所）
- 諫早／長崎県協力隊研修、長崎松ヶ枝国際クルーズターミナル視察
- （予定）熊本／ネイチャーゲーム講座

5. その他

- 登山グループトライアル企画実施／対馬＝日本で一番山が多いことに着目した企画。登山道整備、清掃活動。
- Tsushima international Meet up トライアル企画実施／国際交流
- 登録ガイド／UAE,ブラジルからの旅行客をガイド（英語）
- 昨年度制作した比田勝おさんぽマップの改訂（多言語化）

Ⅱ　令和 6 年度の活動予定

1. 定住に向けた活動

退任後どのような活動を事業としていくか、宿泊施設、国際交流拠点運営、観光ガイド/PR、体験アクティビティ提供、ライター、英語翻訳など、家族の状況も鑑みつつ検討していきたい。まずは、定住活動拠点となるような場所を探すことを予定している。また、子育てとの両立や多拠点生活も視野に入れ、任期が残り 1 年となったら、オンラインでの仕事も少しずつ始めていきたい。

2. その他の活動予定

(1)　つしま森の教室（新たな企画への挑戦、継続運営方法を検討していく）

(2)　対馬観光情報 PR 冊子制作（対馬振興局と協力し作成予定。任期中に撮影した対馬の綺麗な写真を活用して、インバウンド向けや移住定住向けとして作成する。）

Ⅲ　1 年間の活動を通じて感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

昨年釜山との高速船が再開されて以来、身近な海外、自然の豊な美しい離島として多くの韓国の方が来島しているが、現在も買い物がメインになっている団体旅行客も多く、より対馬の魅力を感じてもらえるような仕組みを提供できていない。他地域ではすでに進んでいるように、今後大型バスの団体旅行から、より個人旅行化が進んでいく中で、対馬でも、「ここでしかできない、今しかできない」特別な体験を提供できるようにし、対馬の大切にしたい価値を尊重し、そこに対価を払うことを厭わない方に来島いただけるようにできると良いと思う。

2. 対馬への提案

＜観光＞滋賀で参加した「稼ぐ観光」の研修から、市の指定管理施設、公的機関が主催するイベントなどに民間が稼げる機会提供がもっとできるとよいと感じた。現在観光業に従事している方は、すでに多くの事業を手掛けられている方も多い。上記のような新たなフェーズに移行するにあたり、島外からの移住、スタートアップ、関係人口増などの、いい循環を起こしていく必要がある。そのために、短期で借りることの拠点や起業補助などのサポートを整備、PR が必要。また、比田勝の観光案内所は基本的に一名で対応しているが、対馬の規模では案内所でもツアー催行などの役割を担う必要があり（滋賀研修より）、その為には比田勝の案内所への増員が必要ではないかと考える。

＜子育て＞対馬での子育てについて話をすると、興味を持つ人は多いが、すぐに移住までは決断できない。保育園留学などの制度を導入し、都会からの短期的な受け入れから移住や関係人口創出につなげていけるような制度整備を提案したい。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書

所　　属　農林水産部 自然共生課
ミッション　自然共生チャレンジャー
氏　　名　荒井 勇人

Ⅰ　令和５年度の活動成果

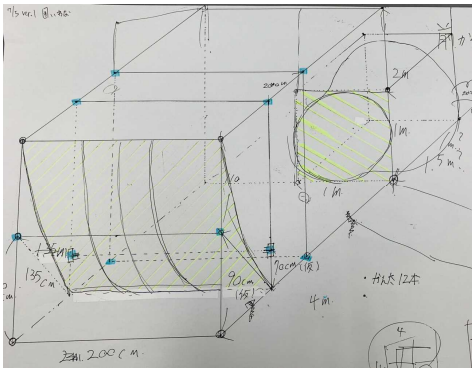
1. ICT を活用した有害鳥獣対策と生態系被害対策

主に通信機能付き自動撮影カメラ TREL 4G-R（以下 TREL)を用いて、誘引状況、頭数把握捕獲の様子等を画像や動画データとしてメールで取得する事が可能であり、効率化や負担軽減を図り捕獲活動を行った。

(1)　潜り込み式囲い罠

和歌山県で開発された潜り込み式囲い罠を参考に対馬での効果的な捕獲手法となるかを試験的に開始した。今回、実証実験している潜り込み式囲い罠と従来の囲い罠との違いについては大きく3点ある。①移動、組立が容易な点。 ②穴や隙間から潜り込むシカの習性を利用した入口。③大きな音を鳴らさない事で警戒心の高いシカ(スマートディア)を増やさず、継続的に多頭捕獲を行う事が可能な点。これらの特徴があり、対馬では新しい捕獲手法への挑戦となっている。今後、対馬市にて新たな捕獲手法として普及できるか実証実験を行い検証している。

【囲い罠概要】



８月上旬から囲い罠の設計や必要な資材のリストアップ、資材の調達や場所の選定等を開始。サイズは、高さ2m×幅2m×奥行4m で設計。資材は単管パイプ、クランプ、防鹿ネット、弾性ポール、結束バンド等、ホームセンターでも購入が容易な資材を使用し組立を行った。場所の選定は4つの条件で選定を行なった。①携帯電波の有無。②資材運搬・組立に容易な場所。③傾斜の少ない地形。④シカの生息密度が高い地域。これらの条件から選定した。候補地として、小鹿林道、三浦林道、三根、

志多留で調査をした。TREL のモニタリング結果から、最終的に志多留地区の耕作放棄地にて捕獲実証実験を行うこととした。

志多留地区内では6地点で TREL を使いモニタリング、誘引、周辺調査を実施した。これらの内、誘引される頭数、メスシカの撮影頻度が高い2地点(T5、T8)に絞り、2地点で平行して囲い罠捕獲に向けた順化を開始した。

【T5地点】

①[10/16]地面に単管パイプを置き、エサ(ヘイキューブ)を撒いて誘引を開始。

②[10/25]単管パイプをクランプで接続し立体構造へと移行。

③[11/7]ワイヤーメッシュを側面に設置。完食率と撮影頻度が落ち始めた。

④[12/13]状態を②まで戻し誘引のやり直しを図った。

TREL の画像データから、状況は改善せず警戒心が高まった可能性があると判断。

囲い罠の進め方について見直しを行った。その後、地点を T8へ変更することとした。

【T8地点】

①[11/2]地面に単管パイプとエサを撒き完食。

②[11/7]単管パイプをクランプで立方体型に組み防鹿ネットで1面のみ高さ1m程開け囲んだ状態で誘引を行う。

③[12/26]開口部に高さ1mの位置で単管パイプを設置。

④[1/11]直方体型に組み立て周囲をネットで囲む。開口部にネットは設置していない。

⑤[1/17]潜り込み式囲い罠として完成し設置、誘引中の状態。

誘引状況は順調であり、12 月下旬には TREL にて 13 頭程の群が確認できた為、地点を変更するに至った。防鹿ネットを下から潜り、エサを食べる様子や囲い内部に入りエサを食べる様子も確認できた。その為、T8では順調に囲い罠の本設置まで進めることが出来た。現時点で潜り込み式囲い罠は、潜り込み開口部の高さ調整が必要であり、捕獲には至っていない状態であり、今後、開口部の高さを徐々に下げる事で捕獲に至る予定。

(2) TREL とくくり罠を用いた捕獲活動実績

TREL を用いてモニタリングを行い、獣の動きや捕獲があった際の判断材料として活用。以下の表はくくり罠による捕獲の結果である。

捕獲日	場　所	捕獲頭数	罠設置数	罠　期　間	誘引期間	誘引数
3/31	濃　部	1 頭(猪)	4　基	3/28～3/31		
	神　崎		5　基	4/20～4/26	4/18～4/27	6 地点
6/20	濃　部	1 頭(猪)	3　基	6/13～6/23		
	濃　部		6　基	7/6～7/31	7/4～7/31	2 地点
9/1	小　鹿	1頭(雄鹿)	5　基	8/30～9/8	7/24～9/6	2 地点
	濃　部		5　基	11/27～12/27		

2. 銃器を用いた捕獲活動への挑戦に向けて

今後、有害鳥獣対策に従事する“次世代の担い手”として活動する為、第1種猟銃免許、猟銃所持許可を取得。銃猟免許取得の流れや、銃猟を始めるまでに必要な事項などの情報発信し普及啓発活動を行った。

(1) 第1種銃猟免許の取得

今後、対馬での効果的な捕獲手法の模索に向け、捕獲手法の選択肢を増やした。

また、高齢化している有害鳥獣捕獲従事者の後継者となるべく、技術を継承し今後の対馬における有害鳥獣対策に寄与していく。

(2) 猟銃所持許可の取得

3月中に所持許可が認可され、自宅にて散弾銃を所持・保管する予定となっている。来年度からの活動に向け準備を進めている。

(3) ハンティングドローン操縦免許取得

急峻な山が多い対馬ではシカが溜まりやすいスポットまで行くのに大変な労力となる。ドローンを活用し、シカを追い回すことで巻き狩りの負担が軽減され捕獲が進む可能性がある。ドローンの操縦には免許が必要な為、3月に対馬市で行われる研修会に参加し、ドローン操縦免許の取得をする予定である。

(4) 対馬学フォーラムにて銃猟についてのポスター展示、発表

対馬学フォーラムにて、題名『銃猟のすゝめ』としてポスター展示と発表を行う。対馬で銃猟をする際、取得までに掛かる経費や取得までの流れなどをまとめた内容で発表する予定である。

3. ジビエレザーを用いた地域イベント

(1) 地域イベントへの出店

◆ TSUSHIMA ADVENTURES 2023

日時:11 月 26 日(日) 12:30～18:00

場所:あそうベイパーク

体験参加人数は 12 名程度。

ジビエレザーを中心としたレザークラフト体験をメインに実施。

自身で製作した革製品の販売も行った。

◆ ハンドメイドワークショップイベント

日時:12 月 24 日(日) 13:00～17:00

場所:交流センター3 階

体験参加人数は 13 名程度。

ジビエレザーを中心としたレザークラフト体験をメインに実施。

自身で製作した革製品の販売も行った。

(2) 第1回 協働隊フェス

活動報告会の中止に伴い、代わりとして協働隊が企画した体験型活動報告イベント

日時:2月11日(日) 10:00～14:00

場所:青年の家

対馬で獲れたイノシシ・シカのレザーを使い、皮革用染料を用いて染色することでオリジナルのコースターを作成する体験メニューを実施。体験参加人数は約 60 名であり、小学生から大人まで幅広く体験していた。今回のワークショップについて、刃物を使用しなかった為、幅広い層で革染め体験が可能であった事がこの人数に繋がったと感じている。

第1回協働隊フェス全体の来場者数の合計は344人となっており、例年の活動報告会形式よりも多くの地域住民に協働隊活動の周知ができ、充実した報告会となった。

Ⅱ 令和 6 年度の活動予定

1. 継続的な有害鳥獣対策、効率的な捕獲手法の模索

(1) ICT を活用した捕獲手法の模索

(2) 大型囲い罠を使った多頭捕獲をする手法

(3) 銃器による効果的な捕獲手法の模索

2. 共猟への参加

(1) ハンティングドローンを用いた巻き狩りへの挑戦

(2) その他巻き狩り等への参加

3. ジビエ素材を活用した地域活動

(1) ジビエレザークラフト体験

(2) 皮なめし体験

(3) その他地域イベント等の参加

Ⅲ 1 年間の活動を通じて感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

【魅力】山や木々の緑、太陽の光でキラキラと輝く海など、美しい自然の景色が豊富にある所。季節によってもその表情は変わり、いつ見ても感動できる景色が存在するところが魅力。

【課題】美しい景色のすぐ隣には漂着ごみがあったり、山の中には不法投棄されたゴミがあったり、下層植生の衰退など自然環境に関する課題があると感じる。

2. 対馬への提案

私が対馬に移住してきて1年半ほど経つが、これと言って大きな不自由はなく、むしろ時間の余裕があり生活がしやすいと感じている。最近は、対馬の各地でイベントやお祭りがあったり、新しいお店ができていたりと地域が活性化しているように感じる。今後もこのような流れの中で徐々に地域が活性化していけば、より良い対馬になっていくと思う。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書

所　　属　上対馬振興部
上県行政サービスセンター
ミッション　対州馬保存・活用支援担当
氏　　名　中屋 桜

Ⅰ　令和５年度の活動成果

1. 子ども世代に向けた対州馬活用

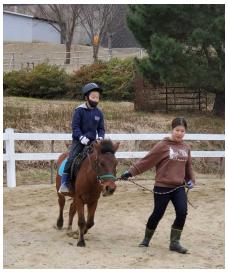
(1)　保育園、小中学校における総合的な学習の時間

目保呂ダム馬事公園、あそうベイパークの職員および吉原隊員と共同で、依頼のあった6つの保育園および小中学校（保育園：1小学校：3中学校：2）の授業においてふれあい・乗馬体験や対州馬についての講義を行った。その他にもあそうベイパークにて職員が単独で対応している学校もあり、昨年よりも多くの学校とつながりを持つことができた。対馬の民謡であるしんき節やツシマヤマネコとの比較など馬だけでなく他の分野と連携した授業も展開することができ、多くの生徒から「もっと対州馬と関わりたい！」との声を聴くことができた。今年度対州馬展を行ったことでパネルや図録、AR 対州馬など教材が増えているため、来年度もより多くの学校とつながりを持ちたい。

(2)　子ども乗馬教室（ほっぷすてっぷ対州馬）

あそうベイパークにおいて本年度から新たに親子乗馬教室（ほっぷすてっぷ対州馬）を月に1～2回実施した。目保呂ダム馬事公園で行っている対州馬少年倶楽部とは異なり、3 か月ごとに参加者を入れ替える方式で行った。令和 5 年度において 12 家庭 29 人の方に乗馬教室を楽しんでいただくことができた。また、次も参加したいという声も多くいただき、ライトな対州馬ファン層の増加に役立ったと感じている。

(3)　対州馬乗馬教室発表会・ふれあい体験会



10 月 21 日に目保呂ダム馬事公園にて対州馬少年倶楽部（目保呂で月に1～2回行われている乗馬教室）の児童を中心に対州馬乗馬教室発表会・ふれあい体験会を行った。かつて仁田地区の祭り初午祭の余興として親しまれた馬跳ばせ（対州馬の速さを競うダービー）のデモンストレーションも行い、延べ 100 人の方に対州馬のことを知っていただき、触れ合っていただく良い機会となった。

2. 対州馬における飼養管理に関する調査

(1) 対州馬見守りカメラの設置(TREL-4GR)

対馬市と SDGs の推進に関する包括連携協定を締結している KDDI より見守りカメラ TREL-4GR の貸与を受け、種雄馬 2 頭を飼養している放牧地および目保呂ダム馬事公園内での妊娠馬の馬房にそれぞれ 2 台設置を行い対州馬の見守りを行った。放牧地では職員が常駐していないが、見守りカメラにより送られてくる定期的な画像で馬の様子を把握することができた。

(2) Wi-Fi 型見守りカメラの設置

妊娠馬の見守りを目的として Wi-Fi 型ペット見守りカメラ tapoC200 を導入した。スマートフォンアプリを用いて見守りを行うことができ、分娩が始まったのは業務時間外であったが当カメラによって分娩開始をいち早く発見し、対処することができた。また、付け替えも容易なため体調不良の馬が発生した場合、その馬の見守りを家から行えることでスタッフの労働時間削減につながった。

3. その他

・先進地調査(長野県木曽町　木曽馬の里、長野県茅野市　蓼科ポニー牧場、東京都目黒区碑文谷こども動物広場、東京都葛飾区ポニースクールかつしか、神奈川県相模原市相模原麻溝公園ふれあい動物広場)

・研修(沖縄県　宮古島での在来馬講習会)

・普及啓発イベント（長崎県森きらら、宮城県八木山動物公園）

Ⅱ　令和 6 年度の活動予定

1. 乗馬教室の継続と拡大　乗馬イベントを教員や小中学生にむけても

(1) 教員向け乗馬会の実施

あそうベイパークおよび目保呂ダム馬事公園で開催している乗馬教室は対州馬の関係人口を増やすうえで効果があると感じている。しかし人数が限られてしまうことから対州馬のファン層を増やすうえではより多くの人数にアプローチできる学校での活用に力を入れていく必要があると考える。現状では教員が対州馬とかかわる機会が少なく、どのような内容が行えるかが不透明であるため、学校での活用におけるハードルになっていると考えられる。そのため目保呂ダム馬事公園およびあそうベイパークで 1-2 ヶ月に一度程度乗馬会を実施し、より学校での活用にアプローチをしていきたい。

(2) 小中学生に向けた乗馬イベントの実施

今年度学校を訪問した際に「もっと馬に乗りたい、関わりたい」という声があがっていたが乗馬イベントなどが実施していないことからニーズに応えられていないことがもったいな

く感じる。そこで今後は、現在行っているあそうベイパークでの乗馬会をより広く周知する他、訪問した学校の生徒に対して乗馬イベントを対州馬施設で開催し、対州馬に親しむ人を増やしたい。

2. ホースセラピーの実施　福祉分野での活用を強化

対州馬は性質や体型としてホースセラピーに向いている馬が多いと感じているものの、現在対州馬の利活用において福祉分野での活用はいまだ不十分なように思う。そこで今年度同様教育支援団体などと連携を継続しつつ、自分自身が主体となりホースセラピーイベントを行いたいと考えている。

3. 対州馬の飼養管理に関する調査の継続・拡大

(1)行動分析

GPS やトレイルカメラなどの機器を活用し対州馬の相性や行動特性を調査する。

(2) 体重推定式の作成

馬の飼養管理において体重測定は重要であるが、体重計は高価なため導入が難しい。そのため体重計がない施設においても体重が推定できるように、今年度目保呂ダム馬事公園に導入された簡易体重計を用いて対州馬におけるメジャーを用いて体重の推定が行える式を作成する。

4. 対州馬イベントの実施

対州馬の活用機会を広げるため他の協働隊員や機関と連携しつつ下記のようなイベントの実施を行いたいと考えている。

・海ごみ×対州馬イベント:海岸清掃の際に馬にゴミ袋を背負わせともに海岸清掃を行う

・観光　×対州馬イベント:厳原の街並みや海岸などでの乗馬体験を提供する

5. 聞き取りの実施

かつて対馬で対州馬と生活してきた方は高齢であり、対馬の馬文化を継承していくうえで聞き取りを行い文章に残していくことが必要だと感じている。そこで昭和時代の馬との暮らしや働き方、道具の扱い方などについて聞き取りを行い文書にまとめていくと同時に、馬耕や荷駄馬などかつての活用方法の再現にも挑戦していきたい。

Ⅲ　1 年間の活動を通じて感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

対馬の魅力は、その豊かな資源にあると感じている。一年間対馬で過ごし、海、川、森、生物、歴史など、島には多くの資源があふれていることに驚いた。また、これらの資源を活用するために専門家が多く存在していることは、他の土地にはない対馬の魅力

であり、資源だと考える。来年度の活動でも、対州馬と他の分野をつなげることができないかと検討していきたい。

また、これらの資源から構築される対馬の風景や環境は非常に価値のあるものだと感じる。活動を通じて、馬を中心に多くのことを学ぶ子供たちや、それを見守る保護者、地域の方々といったさまざまな人々が、対州馬が生活に根付いてきた対馬ならではの唯一無二の光景を共有していることに感動を覚える。

学校での活用において、馬を怖がらない子供たちや、親族が馬を飼っていたという馬にルーツを持つ子供たちの多さも、対馬ならではの魅力だと思う。これらの資源や魅力を活用するために、来年はさまざまな方法で対州馬の活用に取り組んでいきたいと考えている。

2. 対馬への提案

(1) 教育における対州馬の活用

対州馬は、歴史、生物などさまざまな教科において教材として活用できるポテンシャルを持っていると考えており、小中高の教育機関で、対州馬を多角的に取り上げる機会を増やすことで、教育的効果を高めることができると感じている。ツシマヤマネコと並んで同じく希少種である対州馬についても学校で学ぶことができれば、今後の保全活動においても大きな力となるだろう。

そのためにも、今年に引き続きご協力いただければと思う。学校での活用は、教科での教育的効果だけでなく、生徒たちの居場所を創出する一助にもなる可能性があるように思う。

(2) 対州馬の活用方面の増加

対州馬は、その温和な性格と小柄な体型からさまざまな活用方法が考えられるものの、対馬島内での対州馬の知名度が未だ高くないのは保全・活用を行う上で大きな課題であるように思う。馬と関わることに興味を持つ人々にアプローチするために、イベントや市のメディアなどで対州馬を積極的に取り上げていただくことができれば、島内の方とのつながりができ、対州馬の魅力や活用の可能性を広げることにつながると思われる。

令和5年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書

所　　属　しまづくり推進部 SDGs 推進課
ミッション　SDGs 研究員
氏　　名　岡本 遥香

Ⅰ 令和5年度の活動成果

1. 対馬グローカル大学 高校生ゼミ講師

令和 5 年 8 月から 10 月まで対馬グローカル大学の高校生ゼミ講師を務めた。対馬グローカル大学は、持続可能なしまづくりのための人財育成を目的に対馬市が運営している学びの場で、そのうちの高校生ゼミは市内高校生や対馬に縁のある高校生を対象とした学びのカリキュラムである。本年度は「対馬の暮らしの未来を考え、その魅力を発信しよう」というテーマで、対馬の地域の課題や魅力を知り、それらについて発信をすることを目指してゼミを行った。

表 1 令和 5 年度実施の高校生ゼミ一覧

ゼミ	日時	内容	場所
第 1 回	8 月 4 日（金）	事前学習	対馬高校
第 2 回	8 月 18 日（金）～20 日（日）	現地実習（2 泊 3 日）	千尋藻、赤島等
第 3 回	8 月 31 日（木）	発表に向けたまとめ作業	対馬高校
第 4 回	9 月 26 日（火）	発表に向けたまとめ作業	対馬高校
修了発表	10 月 1 日（日）	学長（市長）への成果発表	対馬市役所

本年度は参加者が対馬高校の 3 年生（大学受験生）で、現地実習前のインプットとまとめのアウトプットに使える時間が少なく、不足分は Teams アプリのチャットを通じてやりとりを行った。

受講生は現地実習で感じた対馬の課題や魅力について、「誰に」「なぜ」伝えたいのか深掘りしながら、SNS や広報などの媒体についても意識しながら情報発信の企画書を作成した。発信のテーマとしては「対馬の人のあたたかさ」「世代をこえた交流の楽しさ」「海ごみの問題」「郷土料理ろくべえ」「対馬の海の楽しみ方」というテーマがあり、それぞれが現地実習で感じたこと・人に伝えたいと思ったことについてどうしたら伝えたいと思っているとおりに伝わるかなどを意識して作成した。

受講生たちはゼミ開講当初、対馬の魅力や課題を書き出すワークでは、普段よく見聞きすることを書き出している印象で、あまり実感を持てていない様子だった。しかし現地実習を経て、自分自身の実感として魅力や課題を認識することができ、それを企画書にまとめる作業でより明確に意識し、言語化することができたと感じる。

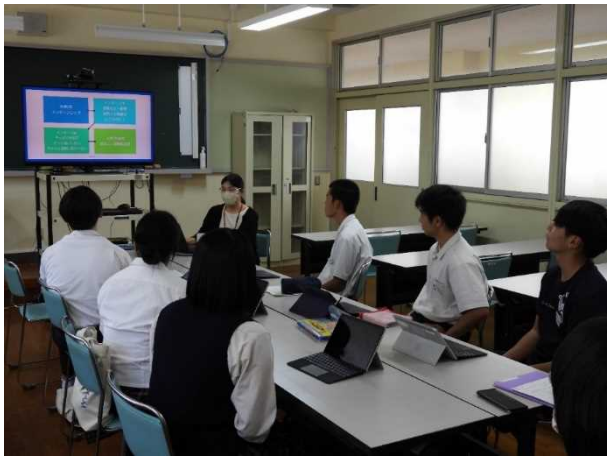
一方で反省点として、関心を持ったことについて探究する時間を取れなかったことがあり、参考になる事例などを調べられなかったために受講生自身、成果のイメージをつかみにくい様子だった。また少人数（受講生 5 名）だったため、現地実習後から修了発表まではゼミの不足分を Teams

で企画書を提出してもらい、コメントを付けて返却、訂正後再び提出というやりとりを数回行うことができたが、受講生の意図が上手くくみ取れず、こちらの意図するニュアンスなども伝えられないというオンラインでのコミュニケーション上の難しさもあった。

また高校生ゼミ自体の実施について、コロナ中は対象を対馬高校生に絞っていたため、当初は他 2 高校からも参加者を募り 3 高校合同での開催を目指したが、スケジュールを合わせることの難しさから本年度も対馬高校のみとなった。加えて貴重な課外活動（校外活動）の機会であることから、大学入試の面接や小論文等の役に立つ経験として 3 年生に先生方から参加の声がかけられていたという経緯もあった。

この反省を踏まえ、次年度は 3 高校の生徒が参加できるよう、スケジュールに左右されにくい夏休み中の短期合宿のみの開催を検討している。参加学年は島おこし実践塾のように 1 年生から 3 年生まで広く募集し、高校側の理解も得られるよう説明をしていく。

そして、実施の際は短時間でも探究の時間を取り、またなぜそれが必要なのかその必要性について伝えられるようにしたい。



2. 対馬モデル調査研究

島のサーキュラーエコノミーモデル「対馬モデル」の柱である資源循環分野について、モデルの具体化に向けて対馬の現状把握、他地域での実践事例について調査を行った。

(1) 島内の事業者への実態調査

対馬モデルの構築（特に資源循環について）にあたり、島内の資源循環のあり方や施策を検討するために、島内の飲食・宿泊・小売・物産事業者にアンケート（紙面・ウェブ）とヒアリングを行った。

①アンケート調査

アンケートでは現状課題などを把握し、それらの改善・解決に向けた仕組みを模索するための質問を行った。

表 2 アンケート集計

区分	調査対象数	回答数			回答率（%）
		紙	ウェブ	計	
飲食	75	14	8	22	29.3
宿泊	71	13	6	19	26.7
小売物産	93	40	9	49	52.6
合計	239	67	23	90	37.6

〈アンケート調査の要点〉

- 事業者の多くは商品の廃棄を減らせるように工夫はしているが、小売業などはブランドの価値維持のためや、返品ができるから、といった理由で廃棄もしくは島外に出す、ということがあるとわかった
- 飲食店の廃棄の理由は多くの店舗で食べ残しがメインだが、それに対して対策をしている事業者は少ない。行われている対策の例としては、「お客さんに持ち帰りをお願いする」「要望に沿って量を調整する」といったことがあるが、持ち帰りは食中毒のリスクから店舗側が積極的に勧めることは難しく、量の調整についても常連客でもなければ客側からも店舗側からも頼みにくい。どちらもそれほどの実施率ではないと考えられる
- 宿泊業では、食事を提供する施設については飲食店の課題に加え、アメニティのごみが出る。アメニティのごみも含め、4R[1]の取組みを行っている事業者は 19 施設のうち 8 施設と少なかった。アメニティの持参を呼び掛けるといった取組みも多くの施設で行えていない
- 小売業者は回答は多かったが、無記名の事業者も多く、大きな店舗の記名回答はなかったため、売れ残り品の処理や対策については不明な点が残った

②ヒアリング調査

アンケート調査では捉えることができない現状・課題等について、アンケートでヒアリング対応可と回答があった事業者を対象に、9 件（飲食 4 店舗・宿泊 4 施設・小売物産 1 店舗）に依頼し実施した。以下、ヒアリングの要点を記す。

〈ヒアリング調査の要点〉

- 観光客、特に韓国人観光客の多い比田勝では、飲食業や宿泊業の顧客は多くが韓国人であり、その旅行スタイルや文化により飲食物の廃棄が出てしまうことがある[2]。また、私の印象としてではあるが、事業者側がコミュニケーションを取って解決することに後ろ向きであるように感じた。その理由として手間がかかるといったことや言っても伝わらないかもしれないという不安があることなどが考えられる
- 一方、韓国人観光客の利用が多いコテージでは生ごみの堆肥化を利用者に呼び掛けており、韓国は生ごみ分別回収が進んでいることもあるためか、快く協力してくれるということだった
- 事業者側からの消費者・利用者への働きかけの現状・課題を尋ね、回答として「市全体で取組むルールなどがあると助かる」という声が数人からあがった

[1] リフューズ（使わないという選択によるごみの発生回避）、リデュース（ごみを出さないようにする）、リユース（再利用）、リサイクル（再資源化）

[2] 韓国の文化として「もう満足だ」ということを食事を少し残すことで表す文化がある。近年は韓国の方でも残さず食べる人も多いようだが、年配の方などは少し残されることがあるとのこと。また、味付けの違いにより食べない人もいる。

〈アンケート調査・ヒアリング調査全体のまとめ〉

- 島内事業者でも距離が近い、事業内容が特に近いといったことがなければ、同業で参考になる取組をしている人がいても情報が伝わらずもったいない。フードロスを減らすことにつながった取組や売れ残りを減らすことができた取組、お客さんへの呼びかけ方の例、成功した方法や失敗した方法などを共有でき、気兼ねなく質問をし合ったりできるような横のつながりができたらいいと感じた
- 飲食店での食べ残し削減のためにお客さんに呼び掛けたり、生ごみ堆肥化に事業者として協力したりするうえで、市事業者全体が取組むことが決まっているルールがあると安心して取組めるということで、厳格なルールでなくても、事業者が利用者や客に呼びかけやすい仕組づくりが必要と思われた
- 生ごみ堆肥化の促進について、飲食事業者から、生ごみ回収の頻度・バケツに入れられる量が足りないため、堆肥化事業への協力が難しいという課題の提起があった。特に魚を扱う場合や、ごみが腐敗しやすい夏など、ためておける量が多くても異臭問題が発生し、近隣の人への迷惑も考えると数日でも置いておきたくない、ということだった。協力事業者の増加を目指すうえで、この問題は担当課と情報共有のうえ見直しが必要と考えられる
- プラスチックのリサイクル推進について、個々の事業者でできることは少ない。島全体の回収体制が必要

(2) 事例調査・情報収集

島の資源循環モデルの構築に参考になりそうな事例や取組を情報収集し、応用可能性について検討した。

〈例〉

- MEGURU STATION®：資源回収所兼地域の交流所の 2 つの機能を持つステーション。家庭ごみの分別収集に加え、メーカーによる使用済み製品回収も行っている。着なくなった服などの持ち込み・持ち帰りができるリユース市（いち）・ゼロ円ショップなども併設している。現在対馬市ではごみは収集車による回収か、クリーンセンターへの持ち込みなどに限られているが、市民がいつでも好きな量だけ資源ごみを持ち込むことができるステーションを設置することができれば、まとまった回収量が見込めず回収できていないものなども回収しやすくなり、まとめて送るといったことができる可能性がある。一方で面積が広く、場所によっては住民がまばらにしかいない地域もある対馬では、ステーションの設置場所は一か所では足りず、また自力でステーションまで行くことが難しい人も出てくるといった課題が考えられ、この点を踏まえた対応が必要となる
- 上勝町ゼロ・ウェイストセンター：ごみステーション・くるくるショップ（セカンドハンドショップ）・フリースペース・ゼロウェイスト生活体験宿泊施設が併設。ごみステーションでは分別したものがどこで何にリサイクルされるか明記されている。上記の MEGURU STATION®でも何にリサイクルされるかということは掲示されており、これらの工夫により、市民はより関心を持ってリサイクルに参加できるようになると考えられる
- キエーロ：市民にもできるコンポスト。一般的なコンポストと比べ虫がわきにくく、また生ごみを堆

肥化ではなく分解するため堆肥の処分に困らない。畑を持たない人も取組みやすい。市の生ごみ回収は、室内にしか回収用バケツを置けない人や回収用バケツを汚れたまま家に持ち込むことに抵抗がある人にとって参加しにくいという問題がある。コンポストはこまめに自分のタイミングで自分が好きなように生ごみを出すことができるという利点がある

3. その他

- ESD 推進支援（西部中学校、豊玉中学校、雞知中学校、対馬高校）
- 企業連携支援
- ビーチクリーン支援
- SDGs に関する国内外の情報収集　等

Ⅱ　令和6年度の活動予定

1. ESD 推進支援

(1) 対馬グローカル大学 高校生向けプログラム運営支援

夏休み期間内の合宿という形で単発での実施を予定。3 高校から参加者が集まること、学年も様々な学年になるように募集を行いたい。短期間でも多くのことを知り、深く考えることができるようなプログラムを考えていきたい。

(2) 島内教育機関（小学校・中学校・高校等）における ESD 推進支援・連携

市民が興味関心を持ったことを深めていくことのできる環境づくりや人のつながりづくりを行っていきたい。例えば、対馬高校の ESD 対馬学で生徒が関心を持ったことについて、実際に自分達で何かイベントの実施や、取組をしたいという生徒がいた場合、島内の関連する取組団体との連携サポート等をできれば行っていきたいと思う。

2. 対馬モデル研究・モデル構築

(1) 資源回収ステーション設置に関する調査研究

ステーション設置の企画提案に向け、常設・期間限定の設置といった設置形態や、資源回収以外の機能（ショップなど）を持たせるかどうか、それぞれの場合に具体的に島内のどこに設置可能かといった点について調査する。また各パターンにおいてどのような成果・課題が考えられるかについても研究したい。

(2) 対馬モデルにおいて市民が参加できる取組研究及び構築に向けた可能性検討

本年度情報収集した事例について、対馬での資源循環へ応用可能か検討していきたい。可能性があるものについては実証等に向けて企画提案を行っていきたい。例えば、本年度実施のアンケート・ヒアリング調査で主に飲食事業者から声が上がった「お客さんに働きかけにくい」という点について、量の調節や持ち帰り対応の旨を伝えるポップやステッカーをデザインし配布するといったことや、中学校や高校などでの校内ユーズドクローズ交換会などを企画できたらと考えている。

3. 対馬市の SDGs 推進のための広報活動

(1) SNS を活用した SDGs アクションのきっかけづくり

SNS を活用し、SDGs やそれに関わることに関心がある人の知識のブラッシュアップや、実際に行動してみるきっかけづくりを目指す。SDGs 未来都市として、対馬市の SDGs 公式アカウントを作り発信をすべきだと考えているが、現時点でアカウントの運営者について、人・時間が足りないという課題がある。この点について協議を進め、アカウントが作成できるまでは他アカウントでの発信方法を模索する。

(2) 無関心層への普及啓発

SDGs という言葉を敬遠する人や無関心な人に向け、行動することのインセンティブを発信することで SDGs に関する取組の参加者を増やす。SDGs という言葉が敬遠される理由の一つに漠然とし過ぎているということがある。「対馬の SDGs というのはこういうこと」という具体的なことを伝えることができれば、自分の生活と SDGs のつながりを自覚しやすくなると考えられる。また、年配の層には「エコ」「節○（節電・節水）」などの言葉の方が親しみがあるということもあるかもしれない。こうした目線も意識したい。

Ⅲ　1年間の活動を通じて感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

(1) 魅力

① 人のあたたかさ

胸があたたかくなる気遣い、思い遣りをくださる方がとても多い。安心して生活できる。

② 美しい自然

観光地として有名なところには島内の大人は行かないかもしれないが、友人と行けばよい思い出になるような場所がたくさんある。

③ 相互扶助

街ではあまりない地域や人とのつながりを実感できる。初めて会った人が知人の知人であったり、知人の話に出てきた人が自分の知人であったりするのはコミュニティが密な対馬ならではで面白いと感じる。また、そうした環境で、知っている人が経営する店で買い物をして応援したり、手伝いが必要な時は手伝いあったりという地域の相互扶助を感じられる。

(2) 課題

① 島内の課題に対する市民の関心の低さとサポート体制

島内の課題について知っている、しかし何もしない・する気はないという市民が大勢いると感じる。その背景には、課題が常態化し、状況を改善できるかもしれないという希望が持てなかったり、自分が行動しても意味がないと思っていたりすることが理由としてあるのではないかと思う。また、

自ら「自分に何ができるだろうか」と考えたり行動したりすることはそう簡単なことではないとも感じる。これに対して、すでに取組を行っている団体などが「こういうことができる」「こういうことをしている人たちがいて、これに参加することもできる」といったことをアピールし、誘ったりすることで参加のハードルは下がるのではないか。

しかしながら現状、取組を行っている組織や団体にとって、仲間が増えれば取組が進めやすくなるというわけではないということも予想される。仲間が増えても管理監督ができない場合、取組の拡大などは難しい。こうした点で、サポート体制の構築や人材育成などがもっと必要なのではないかと考える。

② 情報の少なさや遅れ

書籍の少なさが気にかかる。街であれば本屋に立ち寄り、目的がなくても本棚を眺めたりしてふいに出会うようなものに出会う機会がない。また、中高生の図書館利用者が非常に少ないと感じる。背景には、自転車や徒歩など自力で図書館に通える距離に住んでいないことや、バスがあっても本数や時間に制限があり学校帰りや週末も使いにくいという環境面の問題もあると感じられる。インターネットは関心のあることしか出てこず、本がない環境は本がある環境と比べ、世界の広がりや想像力の広がりに大きな差が出ると感じる。特に想像力は学力にも大きな影響が出ると考えられ、対策が求められるのではないか。

具体的な対策の例としては、働く大人や部活・補習等がある中学生や高校生に合わせ、一週間のどこか一日だけ図書館の閉館時間を遅らせたり、若者の利用促進のために人気のある本を入れたりということができないだろうかと思う。実家のある町の図書館は毎週金曜日は閉館時間が他の曜日より 1 時間遅く設定されており、閉館間際は仕事終わりの人の利用も多く見られた。

2. 対馬への提案－「行政職員の SDGs についての学習・情報収集」

SDGs に関心のない市民に行政が働きかけるにあたり、まずは市民の一人でもあり働きかける側の行政職員自身がもっと SDGs についての知識を持ち、意識しながら生活できることが理想だと考えている。自身が所属する部署の仕事が直接 SDGs に関連していると感じられなくても、SDGs 推進員でなくても、SDGs について学び考えることは必要ではないだろうか。

本年度ジェンダーマイノリティーに関する研修に参加したが、これをどれだけの職員が自分の生活する環境と結び付けて考えられているのだろうかと思った。意見交換の場もなく、自身の職場の状況についてアンケートで回答したとしても、改善すべき点を改善する動きにはつながりにくい。業務があり、時間を取るのは難しいかもしれないが、1 年に一度、市役所全体でなく部署内などの小規模であっても、SDGs に関して学んだり意見交換をしたりする場があるといいと感じた。1 年に一度程度であれば、年度始めに対馬市ならではのアイスブレイクとして SDGs に関するワークショップを行政職員でやってみるのも面白いのではないかと思う。

市民の一人として、まずは行政職員から堅いイメージや無関心の脱却を求めたい。

令和５年度島おこし協働隊
年 間 活 動 報 告 書

所　属　　中対馬振興部地域振興課
ミッション　　中対馬ご当地プロデューサー
氏　名　　千原　佑介

Ⅰ　令和５年度の活動成果

1.「対馬市民の当たり前を魅力として発信する取り組み」

（1）　SNS 関連

Instagram アカウント　ちゃーりー対馬暮らし　@cha_ry1217

私自身が対馬を知る一歩として、観光地や景勝地並びに歴史を感じられる地を中心に足を運び、その様子や体験をインスタグラムを用いて発信した。

投稿内容としては、国内でも希少な日本ミツバチの採蜜体験やイカ釣り体験並びに先輩協働隊のおすすめスポットなど、多くの方々の協力をいただきながら、情報発信に取り組んでいる。

←中対馬の船に乗せて頂いた際の
イカ釣りリール動画。
テンポよく、見やすい動画を心掛けた。
ここからフォロワーが増え始めた印象。

工夫した点は、インスタグラムは画像投稿を主とした SNS であるが、新たにリールという機能が追加され、90秒間の動画投稿が可能となったため、画像では伝えることが難しい部分等については動画で投稿する等、分かりやすい発信を心掛けた。近年、Tiktok や youtube,LINE をはじめとしたショート動画の需要が高まっている。ショート動画は若い世代の目につきやすい点、インスタグラムのリール動画に関してはフォロワー外の目につきやすいなど、様々なメリットがある。画像とリールの投稿を交えながら投稿するよう心掛け、動画編集は綺麗な動画を作るというよりは、奇抜な動画を作ることに注力した。

デメリットとしては動画編集という手間がかかることである。ここは数をこなし、要領よく動画編集を行えるよう慣れていくことが必要と考える。

反省点としては私自身の趣味が釣りというのもあり、投稿が海関係に偏っていたため、もっと視野を広げて投稿活動を続けていく必要があるという点である。

初投稿日　10月5日　投稿数　26（リール動画 11　画像 15）

現フォロワー数 456 人（2 月 20 日時点）

対馬散策というタイトルでの中対馬の風景、観光スポットを連続投稿。

2.「地域商社をはじめとした地元企業との連携による地元産品の PR」

(1)　五島・壱岐・対馬　お土産品販売会

12月の12、13日の2日間　長崎県庁にて五島列島、壱岐、対馬の3離島によるお土産品販売会に参加した。

各離島それぞれの名産品、お土産品を並べ、長崎県庁に来られた方や県庁職員に向けて販売した。対馬、壱岐は初めての参加で、前日の長崎放送でお土産品販売会の告知があったこともあり、ものすごい盛況であった。また五島、壱岐の特産品の特徴を知る良い機会であった。五島はうどんなどの麺類や海産物、お菓子類がとてもおしゃれで品数も多かった。壱岐は海産物やお菓子、特に酒類の販売が多く、ブースにも見栄え良くお酒が並べられていた。離島それぞれ個性があり、お客様も楽しそうに全ブースを見て回っていた。

対馬からは地域商社の冷凍製品（剣先イカの一夜干し、アジ一夜干し、アナゴの開きなど）を中心に銘菓かすまき、対馬日本ミツバチの蜂蜜、対馬しいたけなどを販売した。2日間に渡り販売したが、用意した商品がほぼ完売するという予想をはるかに上回る売り上げであった。

対馬の特産品に大きな可能性を感じると同時に五島や壱岐の方々との交流ができたとても充実したイベントであった。

←長崎県庁でのお土産品販売会
対馬ブース

Ⅱ　令和 6 年度の活動予定

1.「神話の里自然公園と憩いの家の活用方法の提案（実施）」

神話の里　憩いの家売店計画

・目的：神話の里自然公園をトイレ休憩スポットから観光スポットへ

現在、神話の里自然公園は和多都美神社や烏帽子岳展望所に向かう観光客のトイレ休憩所となっている。観光バスにおいても和多都美神社～烏帽子岳の行程時のトイレ休憩所として約10分間、神話の里自然公園で休憩している状況にある。そこで憩いの家に売店を設置し、お土産、飲食物を販売することにより、神話の里自然公園で長時間滞在するきっかけ作りを行う。その後、奥にある古民家をギャラリーとした展示会や、イベントを行うなど、観光客が楽しめる場を作り、和多都美神社～神話の里自然公園～烏帽子岳の3か所を機能させた観光ルートを確立することが目的である。

2.「対馬市民の当たり前を魅力として発信する取り組み」

SNS 関連

(1)　目標：Instagram のフォロワー数を1500人

現在もインスタグラムのフォロワー数を増やすよう努めているが、島外からのフォロワー数が少ないのが現状。島外からのフォロワー獲得のため、通常の画像投稿よりもフォロワー外のユーザーが見る可能性の高いリール動画に注力し、投稿頻度も上げていく。

私の課題であるセルフプロデュース（自己演出）を確立し、島内外に自己をアピールする。私自身がどのような人物かを多くの人に知ってもらう。

(2)　SNS「Tiktok」での情報発信

現在も Tiktok は活用しているが、対馬の情報発信等は行っていない。ハッシュタグ機能など特定のユーザーにピンポイントで発信しやすいインスタグラムに比べ Tiktok はすべての投稿動画が様々なユーザーに視聴される可能性があり、拡散力は圧倒的である。フォロワー数も多く、要領掴めている Tiktok と現在、情報発信を主としているインスタグラムを連動させ、Tiktok においても対馬の魅力発信ができるよう努力したい。

Tiktok フォロワー数 4,767 人（2 月 20 日時点）

Ⅲ　1 年間の活動を通じて感じたこと

1. 対馬の魅力と課題

対馬には美しい風景や歴史ある文化、海の幸、山の幸ともに美味しい食べ物など沢山ある。しかし、その魅力が島外に向けてうまく伝えられていないことが現状であると考

える。対馬の魅力のほとんどが実際に住んでみてわかったことである。対馬に移住する前に知り合いや友人に対馬に移住することを伝えたところ、対馬のことを知らない人も多くいた。全国規模でみれば対馬のことを知らない人は数多くいると思う。島外に向けいかに対馬の魅力を伝えるかが課題だと考える。島外出身の島おこし協働隊として島外者目線で思ったこと、伝えたいことを発信していき、対馬の知名度向上に繋げたい。

2. 対馬市への提案

島外から移住してくる人に対し、わかりやすい賃貸、空き家の情報の提供が必要だと考える。厳原や上対馬では不動産会社があり、対馬市のサイトには空き家バンクなどがあるが、賃貸物件の大半は厳原エリアの情報しかなく、その他の地域の情報がほとんど見られない。実際に私が移住する中対馬には物件情報が全くなく、職員の方に頼るしかなかった。厳原以外の地域の物件情報など、移住者を受け入れる体制を整えないことには、移住者を増やすことは難しいと考える。